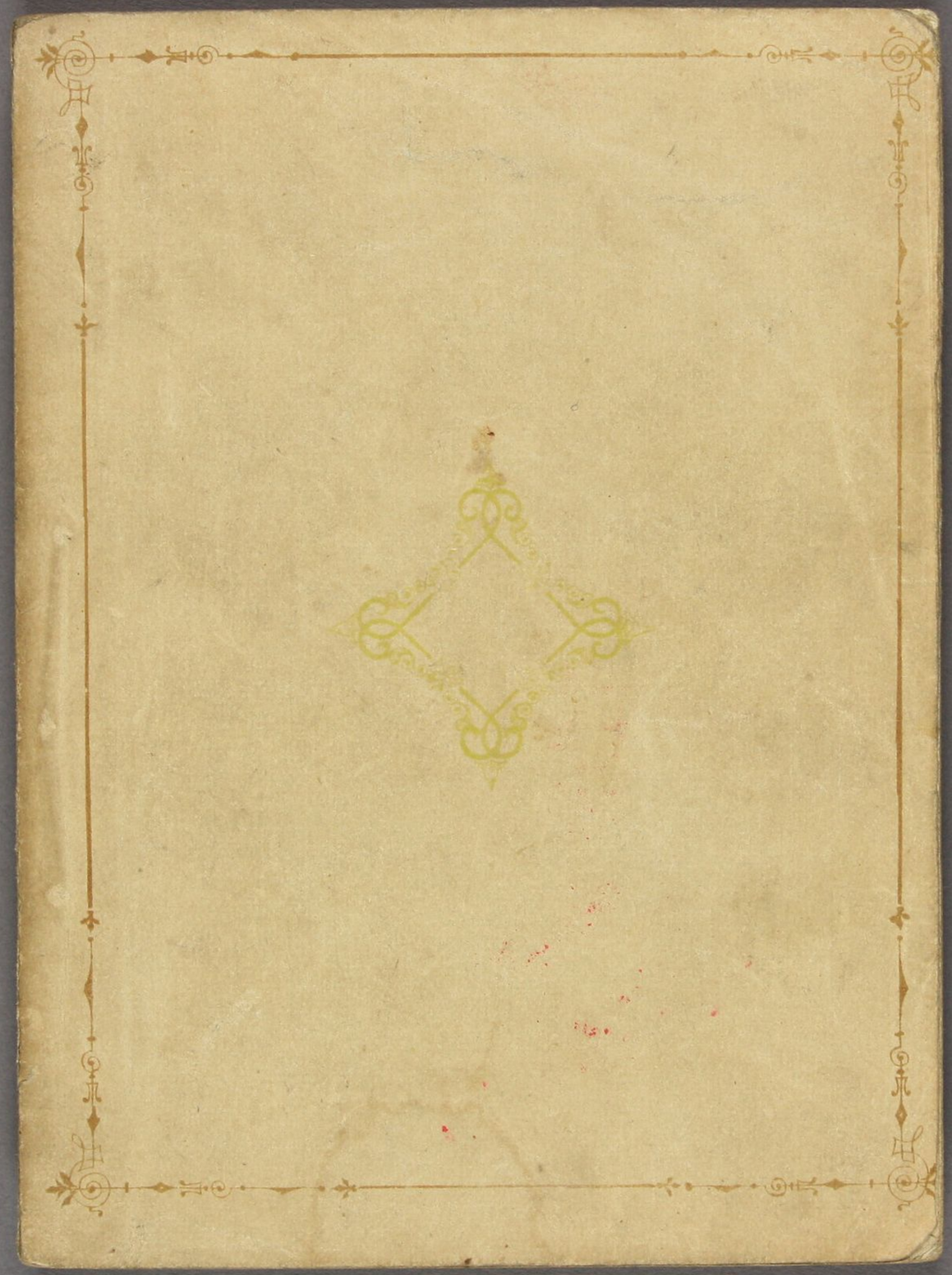
韻文

花月天地

東京　大學館發兌



序

詩は社會の精髄、時代の精神なり。彼の短歌俳句の久しく我國詩たりしか如き之なり。然れとも今后短歌の以て衰運は向ふ可く、俳句の以て大に進まさる可きよりして、社會の進運に對し社會の精髄、時代の精神たる可きものは果して如何なる形を以て現はる可きものとするか、所謂新体詩は如何、詩の思想は如何文体は如何聲調は如何等深く之か研究を要するものあり。然るに所謂新体詩の世に出てゝより茲に僅に十數年、未た以て國詩として大に揚るものなく、其幼稚や實に歴然たるものあり。

今にして深く之を研究せず、之を保育發達せしめずんは亦如何ともす可らざるに至らん。即今其研究に資せんか爲、多數の思想、幾多の文体、種々なる聲調を有する幾十の新体詩を拔き來りて比較研究の料に供す、是當に故を温めて新しきを知るの爲に出てたるもの、適以て國詩界に對し些美の貢献たるを得んか、敢て本書の微意を記し以て序とす

松籟誌

例言

一 本書集錄せるは世の韻文新体詩研究の士に資し併せて讀詩家の愛讀に供せんとてなり、故に世人が口に膾炙せるものは之をとらず、流行せるもの必ずしも名詩ならざればなり寧ろ隱れて現はれざる名詩のみを收め專ら詩風の体と樣とを比較研究するの便に供す。敢て當時に喧傳されしものなきを怪む勿れ。

一 本書は專ら我新体詩の過渡時代のものをとれり、敢て古きは之をとらず又敢て新しきも之をとらず、二十七八年頃より三十年迄の間を標準とし又此の時代の風潮に似たるものは新古共に之をとれり、晩翠氏の如きは少しく新しと雖比較研究の上には便宜多しとて取りぬ。

一 本書分つて七つとす春の日、夏の夕、秋の夜、冬の朝、戀、離別、雜とし附錄に批評四篇を添ふ。詩の全体は殆んど戀に包

まると雖詠物、劇詩感慨、輓詩等のあるあり、今大方の戀をすて丶少しく戀の部に收め他を時に配し離別と雜の部に多くの種類を盡しぬ。

附錄は即此過渡時代の風潮を論評するもの丶中より四篇をとりて之を收む第一篇は此時代の以前の面影を窺ふ可く以下は出來事と風潮を見るべし

一 本書は先づ過渡時代にとり之を中堅とし追ては前后相次き新古を加へ以て完全なる新詩の經過を殘す可し、希くは編者の微衷國詩界への貢献其時に至つて全からんかな。

一 本書の材料は或は文學界或は反省雜誌或は世界の日本等其他によりたるものあれば敢て茲に謝す

編者述

韻文 花天月地目次

春の曰

春の日……島崎藤村……一
遼東の春……與謝野鉄幹……三
殘雪……武島羽衣……四
春の夜……松　男……八
春の夕暮……大町桂月……八
山の影……仝……九
柳の糸……仝……一〇
桃さく宿……宮崎湖處子……一一
山家……仝……一一

花すみれ……河井醉茗……一二
菫の床……太田玉茗……一六
花に嵐……仝……一九
はなれ駒……仝……一九
潮音……藤村……二一
舞子の濱……佐々木信綱……二二
離れ小島……仝……二三

夏の夕

この夕……藤村……二五
夏の夜……仝……二八
緑の蔭……土井晩翠……三五
新緑……佐々木信綱……三七

氷うり……佐々木信綱……三八
里の夕立……緒方流水……三九
蛙の聲……晩翠……四三
蛙……湖處子……四八
廣瀬川……晩翠……五〇

秋の夜

秋の夜……國木田獨歩……五三
わが星……仝……五四
秋風の歌……藤村……五五
秋の蝶……鹽井雨江……五九
妻とう鹿……玉茗……六四
朝がほ……六六

むしの音……天眞……六七
盆祭……鉄幹……七四
魂まつり……羽衣……八五
ひとつ家……田山花袋……九二

冬の朝

朔風……湖處子……九四
さよ時雨……雨江……九四
冬の夜……鉄幹……九七
年のくれに……羽衣……九七
冬四つの小琴の内……みづほのや……一〇一

戀

戀……羽衣……一〇六
仝……獨歩……一〇七
もり陰……花袋……一〇七
湖畔雜吟……仝……一〇八
園の清水……松男……一一二
日の夜……仝……一一三
夕月夜……花袋……一一四
雞……藤村……一一八
我かさは姫の君に……松男……一二九

離別

別れ路……馬場孤蝶……一三二
僧元恭を送る……鉄幹……一四三

さらば君……醉茗……一四五
うしろ影……仝……一四七

雜

四季……竹の里人……一五二
髑髏舞……羽衣……一六五
籠鳥の感……晩翠……一七四
むかしにて……雨江……一七五
蒼若を懷ふ……竹の里人……一七七
中野逍遙をおもひて……佐々木信綱……一九〇
わか友……獨歩……一九一
彼君……仝……一九二
うたかた……羽衣……一九三

母の遺骸にむかひて……鉄幹……一九八
母を葬るのうた……藤村……二〇一
墓上の花……晩翠……二〇五
墓……花袋……二〇七
山中の石……鉄幹……二〇八
故徑……藤村……二一〇
やぶれ琴……雨江……二一二
はてなき海……獨歩……二一六
俚歌に擬す……正岡子規……二一九
漁翁の娘……大野洒竹……二二六
淡路少女……大和田建樹……二二七
題圖……鉄幹……二二八
梅花鶴詩堂に題す……仝……二二九

附録

新體詩に就きて……二三〇
新體詩の近況……二四〇
新體詩人會……二五七
竹の里人……二五九
新體詩界……二六一

韻文 花天月地目次 終

韻文

花天月地

春の日

久方の光のどけき春の日に
しつ心なく花の散るらむ

友則

春の日

島崎藤村

たれかおもはん鶯の
涙もこほる冬の日に
若き命は春の夜の
花にうつらふ夢の間と
あゝよしさらば美酒(うまさけ)に

うたひあかさん春の夜を

梅のにほひにめぐりあふ
春を思へばひとしれず
からくれなゐのかほばせに
流れてあつきなみだかな
あゝよしさらば花影に
うたひあかさん春の夜を

わがみひとつもわすられて
をもひわづらふこゝろだに
春のすがたをとめくれば
たもとにゝほふ梅の花

あゝよしさらば琴の音に
うたひあかさん春の夜を

遼東の春

鐵幹

形見の上着、血だらけの
かくしさぐれば鉛筆に、
「遼東の春、美代子どの、
兄より「とある紙づゝみ。
中にはなかば、萎みたる、
すみれ、たんぽぽ、一にぎり、
辭世の句おやみじかくも、
「土饅頭せめては花の咲きぞころ」

殘雪　羽衣

今はかぎりぞ山の端よ、
今はかぎりぞ山の端よ。
こぞの師足の降りごほり、
木がらしさえしその日より
汝があたゝけき胸のへに、
われをかくしゝ山の端よ。

今はかぎりぞ山がはよ、
今はかぎりぞ山がはよ。
ねられぬ冬のよる〳〵は、
わが枕べをすぎがてに、

しらべをかしきねにたてゝ、
我をなぐさめし山がはよ。

立ちかへりくる初春に
こちふく風もぬるみつゝ、
かすみうめたる谷の戸を、
かたりていづる鳥見れば、
わが世の中にあとたえて、
消えなん時はきたりけり。

あはれ山の端汝がみねの
松のみどりのきはみなく、
あはれ山がは汝が底の、
さゝれの石のかぎりなく、

心したしき友とちに
千世もへんとは思へども。
春をへだてし杣川の
岩まのたるみしたゝりて、
みすゞがもとのわらびさへ、
はやもえいづるさま見れば、
わが世の中のあとたえて、
きえなん時はきたりけり。

な嘲りうあさけりそ、
天ぎる風にきほひつゝ、
野山ともなくふりつみし、
わがいにしへにひきかへて、

朝日てるまもまちがてに、
もろくもきゆる身のはてを、
げにやわしたに生れでゝ
夕べをまたぬかげろふの
われ人みなのいのちしも、
いづれか無盡永劫(イタヅラニチ)の
大海原とつもるべき
しづくの數にあらさらん、
生ひさきこもる野や山の
千草をわれは實になつて、
すめ大神のかねてしも、
よさしたまひしつとめをば、

とげはてぬれば今はとて、
心やすくも消ゆるなり、

春の夜

松男

をぎつね狐はるの夜を
せぬこはなくな故さとの
わが家の鳩がたまさかに
むかしの我を思ひ出でゝ
夢に見にこんればぼろ夜を

春の夕暮

大町桂月

雲雀の聲は地におちて
山もとかすむ夕暮に、

土手のしばふによりかゝり
罪なきことをかたらへば、
少女の袖にはら〳〵と
しづ心なくさくら散る。

春はかすみにうづもれて
夜になりゆく野の末に、
戀ひしきまゝによりそひて
もえたる舌をあはすれば、
足もとに高く音たてゝ
里川やみに流れゆく。

山の影

大町桂月

岸にうびゆる山の影
さやにうして　ゆく水の
こゝろも深き淵なれど、
春のはつ風　ふくまゝに
たつや川なみ　音高く
山をくだきて　狂ふなり。

大町桂月

柳の糸

春のひかりを　うちよせて
ふくや川べの　こち風に、
なびくと見せて　またかへる
こゝろもつらや　いとやなぎ。
なびきも果てぬ　ものならは、
よろによきても　吹かましを、
にくや小枝の　なよやかに、
吹きさしぬれば　まねぐなり、

宮崎湖處子

桃さく宿

桃の花さくゐなか屋の、
乳母が軒端ぞ懐かしき、
乳房わかちてのみたりし、
幼なき妹は今いかに。

山家

八重山櫻さきみてる、
麓の里の草の廬、

ゆきて見ましを生にくに、
中をながるゝ岩瀬川。

八重山櫻さき盈る、
ふもとの里の草のいほ、
樂しき國は彼許（かしこ）なり、
彼許なりとて行すぐる。

河井醉茗

花すみれ

なれし庵をあとにみて
心はそくもわかれ行くを
なれも泣かずやはな菫。
破れし垣根に寄添ひて

語るも問ふも今日迄ぞ
さらばよ菫われゆかむ。

行むと言ふを汝はしも
笑もてわれを止めつゝ
なほも思をまぞはすか。

生ひ出し折も知らざらむ
はてゆく後も知らざらむ
知らねど清き色は持つ。

おほしたてゝし人もなく
おのづからなる春風に

いつかは花もふくらみつ
ちりさへすえぬ面影の
清きをめでゝ汝にのみ
神はゑみをや教へけむ。

汝がかざしのしら露も
なみだとかはる袖の上
人と生れしはかなさよ。

うつろひ易き世の中に
つれなくゆくも止るも
變らであるはいつ迄ぞ。

荒しいはりに殘るとも
ゆかりの色のあせゆくを
愍むひとはなかるらむ。

さとらば頓て汝が身の
假の榮をふりすてゝ
世をはなれずやはな菫。

立より見れば一しほに
花のゑまひのたはやかに
世を厭はしき色もなし。

世は我のみのよならぬを

せまき心にあやまりて
手折らば仇とちりぬらむ

別れの笑をうのまゝに
ながため神は守るらむ
さらばよ菫さきくあれ。

菫の床

太田玉茗

父もなければ母もなく
家もなければ何もなき
みなし子なりと人は言へ。
あはれ少女が心には
悲しきこともなかるらむ、
又憂きこともなかるらむ。

心のどかに春の日の
のどけき光り身にあびて。
うら〳〵霞む春の野の、
すみれの床にすや〳〵と、
眠る笑がほのうつくしさ、
いかなる夢をか夢みつる。

いさゝ小川のさら〳〵と、
ながるゝまゝに黒髪の、
ながきがなかば漂へど、
ころもの裾を春風の、

吹きて拂ひて翻せども、
少女は知らで眠るなり。

蝶は舞へども黄鳥は
鳴けども〳〵歌へども、
入合告ぐる鐘の音は
霞にとはくきこゆれど、
少女は覺めですや〳〵と、
心地よげにぞうち眠る。

眠る少女がかたへより、
立ちしは何ぞ、揚雲雀、
いかなる音をや久方の
雲のあなたに傳ふらむ、
あがり〳〵てあかねさす、
あふべの空に見えすなりぬ。

花に嵐

玉　茗

情なきものとは我言はじ、
こゝろのまゝに今宵こそ、
吹けよあらしよ降れよ雨。
花の命のみじかきも、
榮えて老いて徒らに、
散りて塵とはならぬ間に。

はなれ駒

玉　茗

誰が乘捨てし駒ならむ、
春のこゝろに狂ひてか、
鬣立てゝうら〳〵と
霞める野べにぞ馳來なる。

馳せ來る駒の眼に、
熱き火焰や燃ゆるらむ、
馳せ來る駒の蹄には、
かろき翼や生ふるらむ。

駒は蹄の音たかく、
雲雀の床を蹴かへして、
菫の花を蹴ちらして、

瞬くひまに過ぎにけり。

過行く駒を見かへれば、
かすみに遠く消失せて、
斷く聲ぞひさかたの
空のあなたに聞えたる。

潮音

藤村

わきてながるゝやはじほの
そこにいざよふうみの琴
しらべもふかしもゝかわの
よろづのなみをよびあつめ
ときみちくればうらゝかに

とはくきこゆるはるのしほのね

舞子の濱

佐々木信綱

淺みどりなるきぬのごと、
和ぎわたりたる海のおも、
海士のつり舟ほのみえて、
あはじしま山いとちかし。

風のどかなる春のあさ、
天つをとめがおりたちて、
波のを琴にあはせつゝ、
ひるがへすらむまひの袖。

光さやけきあきの夜半、
月のみやこの宮びとは、
この松かげにまどゐして、
うたげすらしも終夜。

離れ小島

佐々木信綱

漕き行くまゝに近つきて、
離れ小島のまつ原は、
うつし繪よりも美しく、
あらはれ出でぬわが前に。

波のしらべもかすみたり、
ゆふべの風も吹き絶えぬ。
朧ろに月はさしろひて、

まつと花との影あはし。
をもへやかくも美しき、
この松原のなかにしも、
わがなつかしき戀人は、
待ちてあるなり遲しとて。

佐々木信綱

琴の音

春雨かをる夕ぐれに、
おほろ月夜のはるの夜に、
靜かに聞かばいかばかり、
うれしからんを塵あくた。
よふちまたの中にして、
我はきくなり君が彈く、
あたらやさしき琴の音を。

夏の夕

夕風や水青鷺の歷をうつ　蕪村

この夕

嶋崎藤村

さなりなやめる旅人の
みどりのいろの草かげに

流るゝ水をひきむすび
よみがへりするときのごと
乾きはてにし吾潮
また満ち溢るこの夕

星はかなたの屋根を帶び
螢は深き草に飛ぶ
はるかに高き波をあげ
流れて落つる天の河
ちかくは友を呼びかはし
夢をさうひして鳴く蛙

かゝる夕か黄鶴の

うてなのもとの花草に
むかしのあとを忍びしは
かゝる夕か漢江の
岸の楊のかげにそひ
ながれに物を思ひしは、

かゝる夕か幻住の
草の庵のうきわかれ
推に泪を濺ぎしは
かゝる夕か賤が家の
はのかに白き夕顔の
籬のかげのめぐりあひ

聲はなくとも大空の
星にことばのなからめや
花は心を語らねど
やみにかくれてはてつべき
夏のさゝやくひめごとに
耳傾けむこの夕

夏の夜

島崎藤村

母　狐火遠き夏の夜は
青瓢をはたる西風の
賤がふせやの片廂
星のひかりに母と子も

寢物語はするぞかし
汝が嗜みまた汝が讀める
書こゝろやがて水底の
いづれ色彩ある珠ならめ
せめてはわれに見せよかし

子　見れどもあかぬ書なれど
讀みたまふべきものならず

母　つれなの今の言葉かな
世は燃ゆるとも汝なくば
紅蓮の池に我泣かん
あゝ子を抱く親心

汝が口唇の冷たさに
消えんとはせで我身こそ
いやまさりゆく火炎なれ
汝がかきつらねたる言の葉を
せめてはわれに歌はずや
みそらをかける鷲の兒の
われは聽くべし其の羽音

子　しらべも淺きわが歌は
解したもふべきものならず

母　兄にもましてなさけある
子をまうけしと思ひきや

書よむほどの智惠あれど
用なきものを產まんとは
慰め薄き大工も
夕顏棚の下涼み
うきも忘れて親と子が
樂しき酒を飲むぞかし
汝が手に持てる盃を
せめてはわれにくれよかし

子　濁りて清める吾が酒は
醉ひたもふべきものならず

母　情は薄き賈人を

産まんと今は願ふとも
情は深きうたびとを
世に産みたまふことなかれ

子

優しの今のくりことや
筆にうらみは寫せども
母にうらみはよもあらじ
うきよの花に戯れて
羽翼も見えぬ蝶と舞ひ
白露に袖をかたしきて
秋の一葉のゆめまくら
熱き泪に袖濕れて
つらぬきとめぬ玉と散り

無明の闇もひかりある
黄金の珠を彫めし
むかしの人の書ぞこは
見せばやな
たのしさはこれ夏の夜の
夢を寫せし歌ぞこは
あゝあゝ醒めずもあらなん
涙に濁る吾が酒ぞ
せめてはこれに醉ひたまへ

母

いざうたへ

子

君と遊ばん夏の夜の

青葉の影の下すゞみ
短かき夢は結ばずも
せめてこよひは歌へかし

雲となりまた雨となる
晝の愁ひはたえずとも
星の光をかぞへ見よ
樂みの數夜は盡きじ

夢かうつゝか天の川
星に假寢の織姫の
ひゞきもすみてこひわたる
櫻の遠音を聞かめやも

綠の蔭

土井晩翠

枝うちかはす梅と梅
梅の葉かげにうのむかし
鷄は鷄とし並び食ひ
われは君とし遊びてき

空風吹けば雲離れ
別れいざよふ西東
青葉は枝に契るとも
綠は長くとゞまらじ

水去り歸る手をのべて

誰れか流れをとゞむべき
行くにまかせよ嗚呼さらば
また相見んと願ひしか

遠く別れてかぞふれば
かさねて長き秋の夢
願ひはわれぞ陶磁の
くだけて時を傷みけり

わが髪長く生ひいでゝ
額の汗を覆ふとも
甲斐なく球を抱きては
罪多かりし草まくら

雲に浮びて立ちかへり
都の夏にきて見れば
むかしながらのみどり葉は
蔭いや深くなれるかな

わかれを思ひ逢瀬をば
君とし今やかたらふに
二人すわりし青草は
熱き涙にぬれにけり

新緑

佐々木信綱

木間をわくる風あをく、

みどりしたゝる下かげに、
雪をいたゞく卯木あり。
ほゝゑみたてるうばらあり。

春はあゆみをとゝめねど、
野山のきぬは色かへつ。
人の心をなぐさむる、
神のめぐみのあまねしや。

氷うり

佐々木信綱

あはれなり涼しさを人にうりて、
おのが身は汗にぬれゆく氷うり。

人は皆暑けさをわぶる比に、
日の光もゆるちまたをうりあるく。

たが爲ぞ汝が家の富てあらば、
日ざかりに外には母の出さじを。

あれしまがきの女郎花、
露にしをれてたてりけり。

里の夕立

流水庵

ふもとにかたき清閑寺
垣根をぬいて糸野河
村にをつれば淵となり

瀬となる夏のすゞしさよ

里の子あまた泳ぎては
亀の甲ほせるかはら邊に
岸の櫨の木まとにして
石ほりごつても飽きぬらし

あたまの傷の三日月を
あだなに呼ばるゝ年上が
いかにと曰へばよからんと
嘉作が番小屋襲ふなり

はつたの羽音夢に入り
臂をまくらのうたゝねの
嘉作はぎよつと目をさまし
西瓜ぬすめる子らを追ふ

ら來た逃げよと三日月の
跡につゞいていくまがり
田の畔走る落武者が
禿顱爺やい、わい、禿顱爺やい

勝関あげてあつまれる
子らはいましも橋の上に
西瓜わかちて見上ぐれば
阿彌陀寺山に雲はやし

ばつと稲田にたつ雀
案山子と見れば野呂又が
にげゆく跡に夕立の
鳥もをよばず追ふが見ゆ
これはとかけ入る地蔵堂
板戸の隙よりうかゞへば
空になげうついなびかり
こわやとをもはず耳を蔽ふ
臍に餓えたるいかづちは
いたづらものを遁がさじと
鳴るやさあと雲をちて
またひとしきり降りそゝぐ
鳴神やがて遠くすぎ
南の山に夕日さし
祠の松に蟬鳴けば

晴れたぞ虹をあれ見いと
子らはばら〳〵堂をいで
番小屋ちかき此方より
禿顱爺やい、わい、禿顱爺やい

蛙の聲

晩翠

みそらの星のともしびの

油はつきて暗くとも
草に生ひたる夏虫の
慕ふ火影にあらねばや
よろづの羽の音を絶え
聲なき闇にかへる夜は
をり〳〵白き稲妻に
照らされて鳴く小田蛙

いとゞあつさにたえかねて
われもくるしき夏のよの
折あはれなるひとりねの
閨に亂るゝ螢火の
飛ひかふかげに迷ひいで

蛙のうたうふ聲きくに
魔の吹きすさぶ笛かとぞ
あやしまれぬるそのしらべ

なにごゝろなく耳たてゝ
蛙のうたを味ふに
水草のかげにかくれゐて
友呼びかわす聲ながら
かの緑羽の鶯の
はやく谷間の戸をいでゝ
春ちよろづの花に醉ひ
歌をうたふに似ざりけり

または夕月冷やかに
露葉にをもき秋の暮
雲になやめる雁がねや
天の明鏡を舞ひいでゝ
野に亂れたる白菊の
花ふみちらし鳴き渡り
露を悲しむ蟋蟀と
歌あらはふに似ざりけり

空にありては子規
水にありては鳴く蛙
げに新草を褥とし
緑の雨を乳となし

望みあふるゝ青き葉の
樹蔭にいてひ智慧の日の
光に滿ちて燃ゆる火の
手に抱かるゝ夏の兒よ

見よ嬰兒がはゝうばの
母を慕ふにたとふべき
みぎはに深き聲きけば
おのづからなる一ふしは
はがらかなりや夏の歌
かすかなりともあめつちの
しらべに通ふ音なりせば
小田の蛙の聲を厭はじ

蛙

湖處子

長き春日のくるゝまで、
遊びくらして猶あかす、
おぼろ月夜にあくかれて、
田中の路を我ゆけば、
何處なるらんから〳〵と、
蛙の笑ふ聲すなり。

『あな憎し』とて、覺つかな
畔道傳ひたどりゆき、
月影見ゆる苗代の
中を其處かと覗へば

とめ來し聲ははや無くて、
思はぬ方にから〳〵と、
かはづの聲は笑ふなり。

音なふ野川飛び踰て、
背の方を追ひゆけば、
月かげうつる苗代の、
いづれの中とも分ちなく、
乍ち聲はなくなりて、
惑へる我をから〳〵と、
うしろよりこそ笑ふなれ、
背々（うしろ〳〵）となる聲を、

背々（うしろ）と追ふほどに、
追ひくたびれて今はとて、
元來し路に去りゆけば、
聲をあはせてから〳〵と、
いよ〳〵笑ふ聲すなり。

廣瀬川　晩翠

都の塵を逃れ來て
今はが歸る故郷の
夕涼しき廣瀬川
野薔薇の薫り消ゑ失せて
昨日の春は跡も無き
岸に無言の身はひとり

時をも忘れ身も忘れ
心も空に佇ずめば
風は涼しく影冴えて
雲間を洩るゝ夏の月
霞む朧の春の夜は
あはれ昨日の夢なりき。

憂（うき）よ思よ一春の
過ぎて跡なき夢のごと
にがき涙もをもはへば
今に無量の味はあり
浮世を捨てゝおくつきの

暗にとこしへ眠らんと
願へしそれも幸なりき。

流はゆるし水清し
樂の、光の、波のまに
すゞしく澄める夜半の月
自然の心こゝろにて
胸に思のなかりせば
樂しからまし人の世は。

秋の夜

しら雲にはねうちかはしとぶ鷹の
かすさへみゆるあきの夜の月
讀人不知

秋の夜

國木田獨歩

たゞよふ白雲を、如何にせん、
とゞめごと問はん、由もなし。
月さやかに照りて、影さむく、
秋風身にしみて、涙落つ。
悠々の天地に、身を置けば、
哀々のこゝろの、なからずや。
いづこより來りし、あゝ此身、
かの吾友いま、いかにせし。

仰く大空、色、とこしへに、
天のはる〳〵見よ、雲たゞよふ。
涙あり、をのづから落つ。

わが星

秋の夜ふけぬ、高どのゝ、
窓をひらきて、久かたの、
天のはる〳〵求むれど、
あはれわが星見えわかず。
のぼらずや、いまだわが星、
隕ちうせしや、遂にわが星、
あゝ永久に、とこしへに、

秋風の歌

藤村

しづかにきたる秋風の
西の海より吹き起り
舞ひたちさわぐ白雲の
飛びて行くへも見ゆるかな

暮影高く秋は黄の
桐の梢の琴の音に
うのおとなひを聞くときは
風のきたると知られけり

ゆふべ西風吹き落ちて

あさ秋の葉の窓に入り
あさ秋風の吹きよせて
ゆふべの鶉巣に隠る

ふりさけ見れば青山も
色はもみぢに染めかへて
霜葉をかへす秋風の
空の明鏡にあらはれぬ

清しいかなや西風の
まづ秋の葉を吹けるとき
さびしいかなや秋風の
かのもみぢ葉にきたるとき

道を傳ふる婆羅門の
西に東に散るごとく
吹き漂ふす秋風に
飄り行く木の葉かな

朝羽うちふる鷲鷹の
明闇天をゆくごとく
いたくも吹ける秋風の
羽に聲あり力あり

見ればかしこし西風の
山の木の葉をはらふとき
悲しいかなや秋風の

秋の百葉を落すとき

人は利劍を振へども
げにかぞふればかぎりあり
舌は時世をのゝしるも
聲はたちまち滅ぶめり

高くも烈し野も山も
息吹まどはす秋風よ
世をかれ〳〵となすまてば
吹まも休むべきけはひなし

あゝうらさびし天地の
虚の中なる秋の日や
落葉と共に飄る
風の行衛を誰か知る

秋の蝶

鹽井雨江

露のやどりと成りはてし
しのゝ袖がき　去たひ來て、
蝶は、何をか　たづぬらむ、
ふきしく秋の夕風に
つばさも、しのに　去をれつゝ。

今しも汝れが　行き迷ふ、
思へば、かきほの　下蔭に、

わかむらさきの　なつかしく
ほころび初めて、すみれ草、
春は、ねよげに、見えにしが。
汝れか、兄弟か、蝶一羽、
花のべ去らず、通ひ來て、
とひよる袖を、うれしとや、
朝な夕なに、いろ深く
にほひ染めけり、すみれ草。

風も色めく　岡のべの
きほふ花にや、うかれけむ、
蝶は、いつしか　留まらず。
垣のすみれは、こむらさき
ゆかりあやしく、うめにしを。

朝露を

ほろ〳〵落る
はらふと見せて、すみれ草、
垣ほがくれに　まねけども、
うかれ心の　うかれはて、
蝶は、日ぐらし、岡のべに。

花はあとなき　岡のべに、
いつまで春を　夢むらむ、
蝶は歸らず、垣がくれ、
なほ紫の　ゆかしくも、
待ちて笑みしが、すみれ草。

野中の清水、かれ〳〵に
かれゆく夏も、なほあせず、
菫は、もとの　色にして、
うもれながらに　殘りけり
庭の萩はら　葉がくれに。

萩の下葉も　うつろへば、
垣の忍ぶも　うらかれて、
秋は、深くも　成るなべに、
さすがしをれぬ、さひしげに、
うつるとせねど、すみれぐさ。

同じ垣ねの　恨みとや、
ともねにむせぶ　まつ虫に、
さすが慰む、すみれ草、
しをれながらも、紫の
ゆかりの色は、なほかへず。

あらしは、荒く　あれゆけば、
露は、つらくも　つもりゆき、
さすがに堪へず、すみれ草、
さ霧のみ立つ　岡のべを
まもるがまゝに　面垂れぬ。

何に心も　よわるらむ、

つばさも、とみに　力なく、
枯れし葦の　袖のべに
落ちもすがりて、蝶も又、
れなじかきねの　露の伴。

妻とふ鹿

玉　茗

吹く秋風の身にしみて
月えわたる足びきの
山また山のその奥に、
妻とふ鹿のこゑぞする。
妻とふ鹿ぞ其妻を
たづね〳〵て來るらむ、

あはれ聞ゆる其の聲の
いよ〳〵高くなにりけり。
折しもあれや凄しき
銃のおとこゑ聞えたれ、
山より山に谷間より
たにま〳〵に響きつゝ。
銃の響ともろともに
妻とふ鹿のこゑ絶えぬ。
妻とふ鹿を哀れ誰が
　擊ちやしにけむ哀れ誰が。
やがて彼方の深山路を

月に越えゆく山かつが、
獵の歌をば秋風に
うたへる聲ぞきこゆなる。

朝がほ

あはれ優しき朝がほの
蔓のびたれば其つるを、
日ごと〳〵に我宿の
杉の垣ねにまとひしが、
日ごと〳〵朝がほの
蔓はよそにぞさがりたる。
かゝる垣ねにいかで我
昇りうべきと哀れにも
語るがごとく哀れにも
告ぐるがごとく思はれて。

むしの音

天眞

あれにしやとのよもぎふに
ころもかたしきわかぬれば
かことかましきむしのねの
更けてさびしくきこゆなり
あはれなく蟲こと問はむ
なれもこの世をうつせみの
はかなしとのみかこちつゝ
かくもなけくか夜もすがら

われもみやこを出てしより
むかしにかはるうつら衣
さちもみしかき柴の戸に
もるゝしくれやうらの月

さやけき影もうき折は
くもるなみたにかきくれて
むかしをいとゝしのふ草
おもひみたるゝかたびさし

おもひ出れはみやこなる
はるのあうひに駒なへて

やなきを手折り咲く花を
かさしゝことも夢なれや

夏のあつさにむら立てる
くもをもしのくわかこゝろ
そらを蔽ふとしたりしを
あやしき風に遮へられつ

こゝろつく田のかひをなみ
沖の小舟の漕きかてに
うらみのかすはしな川の
はまの眞さてもなにならす

うへ野のかねの常こそは
つね有るおとにきこえしか
かくなりしより淺くきの
あさましきねにひゝくなり

斯くてみやこをあき風と
ともに立ち出て美すゝかる
しなのに來れはいつしかに
もみちしにけり山も尾も

山のにしきを見るにたに
こと就らぬ身のなけかれて
うすきたもとにふりそゝく

しくれのかはくひまもなし
みやこの友もいまは早や
雁のたよりのまれにして
たのみすくなきわか身には
ひなもうき世の外ならす

月の光りによむふみも
はたるほとたに照りはせし
はなとも見ゆることの葉も
深雪の中にうつもれん

よしやこの身はくちぬとも

こゝろはかりはのてさむと
まことをこめて爲すわさも
くさ木とともに朽ちやせむ

あはれ鳴くむしもろともに
こゑのかきりを盡してむ
幸なき身にはさち薄き
なれや此上なきともならむ

あはれなく蟲もろともに
聲のかきりをつくしてむ
さは去りなからくさの葉の
つゆもひとをは恨むまし

おろかなる身は秋の野の
しもに朽つるも枯れゆくも
おのれからなるわさなるを
なにとて人をうらむへき

身をしなけかはあさゆふに
まことつくさん外はなし
世に出てすともまことたに
まもらは何か恨むへき

かたらひやめはやうやくに
ほろる蟲のねかすかにて

かたふく月の影さむく
萩のうち葉の衣も白し

盆祭

與謝野鐵幹

玉やはらかき手をのべて
きよき薄及にはつなりの
西瓜の紅は染めながら
まだあまからぬ恨みかな

足らはぬがちの田舍にて
供へまつらんものも無し
母なき子には陽暦の
盆ごろいとど悲しけれ

いざやいもうと湯あがりに
こよひばかりは化粧して
蒔繪の櫛のおとなしく
鬢のほつれを搔きあげよ

香のけむりに打のりて
はとけは今か來ますらん
軒端のしのぶ風みえて
燈籠の火のゆらぐかな

兄はいかなる顏あげて
こよひはとけを見まつらん

おもへばまたもこの三とせ
あらぬ名のみぞ留めたる

もとより人のあやまりを
いひ解くみちは知りながら
運命つたなき人の子は
世にさからはん力なし

酒にわらひてのかるれば
ものに狂へるわれといひ
戀にやつれてわすれば
痴れはてたるわれといふ

胸のうらはふ瀧つ瀬の
はげしき涙せきあへず
腹だたしさやくやしさの
このわづらひを誰か知る

あゝわすれては幾たびか
よわきなさけに返りつつ
十とせ誓へるますらをの
ねがひもあたら打すてて

かねてこの世に木屑と
くちぎたなくも罵れる
歌よむ身にてわれもまた

朽ちばやとさへおもふ哉

「子のおひさきは親ぞ知る
世に耻おほきわが子よ」と
いさめたまひしみ言葉の
今こそ身にはしみわたれ

ほとけのまへに懺悔する
こよひの我はまことにて
世にしたがはぬすねものの
いつもの我はいつはりか
世にしたがはぬすねものの

いつもの我や假面にて
まづしきに泣き飢に泣く
けふの我身やただしきか

あゝわが胸は三日月の
ゆふべの雲におはれて
わが身はながき亂れ藻の
水にただよふなげきかな

われをなぐさめ勵ますする
ひとりの友はありしかど
黄金のまへのあらろひに
見捨てていにしあさましさ

なさけこもれる初花の
きよき乙女もありしかど
我にはをしきなみだとて
そむきはてたる悲しさよ

火にも入るべくむつまじき
三人の友は得ながらも
まだかたらへる日を淺み
あけてはものの云ひ難き

たれにか問はん我こころ
たれにか告げん我なやみ

あゝ今こそはしのばるれ
母のほとけのいさめごと

「わが子よ山にのぼりなば
けはしき坂を說くなかれ

「わが子よ淵にくだりなば
うかぶ瀨もなく沈めかし

「人をすくはば活かすべく
ろのてのひらに玉を盛れ

「人をのろはば殺すべく

そのふところに蛇を伏せよ

「西にゆくべくゆき得ずば
わが子のゆくは東なり

「あかきうばらとにほはずば
わが子の胸は巖石なり

筆にはとどめたまはねど
世をさりたまふいまはまで
いさめたまへるみことばを
寫せばやがてこれなりき

ほとけよいかに告げたまへ
いもうといかにかたれかし
きのふもけふもあすの日も
わが立つみちはいづこぞや

けはしき坂をゆきかねて
底なき淵に入らんとし
玉をば手よりなげすてて
蛇をふところに伏せんとす

かなしきかなや月の入る
西にはゆかぬ我身なり
うれたきかなやばらの香を

駒には知らぬ我身なり

われまよへるかくるへるか
われさとれるかたたしきか
人には問はじ見うなはす
はとけぞひとり知りまさん

あゝあゝ優しきいもうとよ
うなたまでこそ泣かせしか
いざ顔あげよわが袖に
あつき涙をのごはばや

はかなきわれの述懐に

泣きたまひしぞ嬉しきや
そなたにあらで誰かまた
さばかりわれにやさしかるべき

魂まつり　羽衣

くゆる蚊やりのなかりせば、
ありとも見えぬ山もとの
去げき柳のしたかげに、
かすかにさせる草のいほ。

夕かげふかくなりゆけば、
魂迎ふとやむぐらふの
いぶせき庭におりたちて、

芽殼をりたくたわやめは、
立のぼりゆくけぶりにも、
まがへし人やおぼゆらん。
落つるなみだのさしぐみに、
あやめもしらぬ袖のうへ。
わか子はぐゝむいとなみに、
日にげにやするかひなとも、
知らでやねむるをさな子の
かしらかきなでいひけるは、
「あはれわか子よ心して、

はのほの末をまもりてよ。
けぶりに乗りて父君は、
今こそこゝにきますなれ。」
父としきゝてゐましげに、
かげきゆるまで見てけるが、
やがてこわねもいとひくゝ、
「母うへいづらちゝ君は。」
「かしこにすゆる御佛(みほとけ)の
おましのほとりいとちかく、
なびく烟りは父君の
おはすしるしとさとらずや。」

かく打きゝてをさな子は、
乳ぶさもつ手もをくまでに、
ゑみくつがへりうれしげに、
ほとけのかたに打むかひ、

「あはれ父君年頃の
おぼつかなさにわびはてし
母とわれとを打すてゝ、
いづくの空にゐましつる
君がみ心かくまでに
とまるばかりの國ならば、

なぜてかわれもろともに、
率てしもおはせざりにけん。
いざ今よりはこの宿を、
千代のすみかと定めおき、
いづくに行くもとまるにも、
ひとりはなるゝことはなく、
只玉ゆらの時のまも、
みそばを去らずもあらせよ」と、
ことゝふさまも愛らしく、
しぞけなげにぞ打かたる。

かくするほどに風かよふ
軒にかゝぐるともし火の
まだゝくひまに夏の夜の
明くるにまなく更けゆけば

をみなは乳子を身にろへて、
かたしく閨のさむしろや
とけてねられぬ手枕も、
しばしは渡る夢のわだ。

誓ひの舟にゆられつゝ、
ふたつの海をすぎゆくに、
やがてもはつる鹿の園、

鶴のはやしを見いるれば、

うしろの光りかゞやきて、
たつわが夫のかたはらに、
千草の花をかざしつゝ、
あろぶわが子のあるほどに、

たちまちくだる紫の
雲の迎へに打のりて、
のぼるかかけの大空に、
消えゆくと見ておぞろけば、

わが子の笑がはさながらに

夢のまゝにはのこれとも、
身は冷えいりて玉のをの
いきもいつしかたえにけり、

田山花袋

ひとつ家

見渡すかぎりはる〳〵と、
さはる物とてあらざれば、
月はてりにもてりまさり、
風はあれにもあれまさる。
尾花の中にひと筋の、
みちはあれとも里とはみ、
行かふ人のあとたえて、

訪ひ來る友の影も無し。
かくもさびしき冬がれの、
野口にたてるひとつ家に、
住へる者はあはれ誰ぞ、
やさしき君とこのわれと。

冬の朝

雪の朝ひとり干鮭をかみえたり　芭蕉

朔風

湖處子

この霜朝の朝あらし、
いたはり知す思へども、
私ならぬ風なれば、
吹かれてゆかむ愛とも。

さよ時雨

鹽井雨江

やよや忍ぶの　むら時雨、
さな音たてそ、亂れ來て。

ひとりぬる夜の　さよ枕、
さらでも淋しき　寢覺めなり。

いづべの艶に　漕ぎくれて、
人はまくらむ、浪枕、
いたくな荒れそ、冲つ風、
今宵は、舟路の　人ぞある。

今の夢路に　見えにたる
おぼつかなげの　一葉舟、
さ霧も浪も　立ちまよふ
あを海原の　末遠く。

わが思ふ人の　船にやと
よぶ間もあらず、夢さめて、
影もとどめず　消えにたる
船の行方のおぼつかな。

あな心なの　むら時雨、
またも軒端に　亂れつゝ。
しぬにしをれて、玉の緒も、
今や絶えゆく心地する。

絶えでよ、あはれ、玉の緒は、
ゆきにし人の　立ち歸へり、
ふるやの時雨、今一度、

おなじ枕に　きくまでは。

冬の夜

鐵　幹

按摩上下五百文、
聲より人の影たえて、
辻の柳に一臺の、
人力のこる寒さかな。

年のくれに

武嶋羽衣

隙ゆく駒の足はやみ、
あはれことしも讀みのこす
ふみのくさ〴〵とりそえて、
机につもる年のくれ。

思へばうれし清見潟、
みどりの浪に船でして、
すがた横たふ富士のねの
雪をわけしもこの年よ。

思へば悲し草づゝみ
病ひの床に打ふして、
筆とることもまゝならぬ
身をかこちしもこの年よ。

悲しき年よはやも行け、
うれしき年よしばしまて、

思ひわへなでいづかたに、
よるとしもなき心かな。

「時」のとばりのひまとめて、
はるかのをちをながむれば、
望みのひかりかゝげつゝ、
われをいざなふ「未來」あり。
はてなき闇にかきくるゝ
わがあとのべを見わたせば、
亡き面影をもちそえて、
われを留むる「過去」もあり。

「過去」は道なり鏡なり、

みをつくしなりしをりなり、
わが世の旅にこれなくば、
たゞ〳〵しさをいかにせむ。

「未來」は名なり力なり、
千代の杖なり頼みなり。
わが世の旅にこれなくば、
たゆめる時をなにとせむ。

あはれことしよ早く行け、
尊き過去のつもるべく。
あはれことしよ早く行け、
ゆかしき未來のきたるべく。

四つの小琴の内冬　みづほのや

愛宕山風吹きたえて
月もいざよふ大井川
岩こす波もふけゆけば
おこなひすまする佛の
かねのみ今はしきるなり。
轟くむねをおさへつゝ
月影くらき古寺の
もりの木立をうちすきて
よをへだてにし法の戸に
今ぞとひよる花乙女
おもひまどひて暫らくは

草葉の露をながめしが
今しもたゆる鉦のねに
やをらとほそに立よりて
葎がかどをおとなへば。
『のがれ果てにし我がいほり
つゆしられじの心には
かせだにつらくおぼゆるを
つれなしと見しよの人に
とはるゝよしもあらぬなり』。
只ひとことをいひすてゝ
又打ち初むる鉦のねに
あはすもにくき虫の聲
世のものの皆にすてられし

我が身を今はいかにせん。
『汲みてもたまへやよや君
きみにあはんのねかひより
ひまなき雲の九重の
大宮づかへよろにして
わけこしおのが心根を
渚に生ふるみるめだに
つらしと人もいひにしか
よにつゝましき女子の
ふりはへてこし我が袂
あはれと君も見たまひね。
入る山の端の月影も
去ばしは露に照るものを

ときはの山のとことはに
たゝぬひかりを見る君の
つれなきものかかく迄に』。
とへど叩けどあき風の
うよとともいはぬうたてさに
袖をかへして佇めば
折しも消ゆる月影に
ゆくへや迷ふ孤雁（かり）の聲。

＊　＊　＊　＊

嵯峨野の奥の古寺に
ひとよあかしゝ乙女子は
つゆにぬれにし衣手に
なげきの數をつゝみかね

うらみてこうはかへりけれ。
玄のぶもぢすり誰れ故に
亂れ初めにし糸ならん
ありしよりげに細り來て
草の葉末のつゆの玉
嵐待つまの身となりぬ。
月のなかばもすぎぬれば
いよゝおもひのたへがたみ
弓張月のひくまゝに
迷ひ出でにしあとは只。
雲井のうらのみつぼねに
ちりにうもれてさびしくも
歸らぬ人をまちがはに

四つの小琴ぞ殘りける

戀

我影や月に猶啼く猫の戀　探丸

戀　羽衣

やよひの空の薄ぐもり、
霞よりふるはるさめの
夕べの露のかゝるとき、
花はひときはながめあり。

うれひの雲のかさなりて、
身をしる雨のをやみなく、
袖のしづくのかゝるとき、
戀はいとこうらうたけれ。

戀　獨歩

君北にいますと聞くからに
身をきる風ぞ戀しき
冬枯の野にたちて
悲しき歌うたはゞや

もり陰　花袋

もりの陰にて少女子と、
泣きて別れしふるさとに、
われは歸らんよしぞなき、
うき世の業のつらくして。

せめては似たるもり陰を、
野邊にもとめて分入りて、
かなしくつらきわか戀を、
泣かばやあはれ唯ひとり。

湖畔雜吟

そよげる芦よこゝろあらば、
つれなき君の此處にしも、

來ませし時にかたれかし。
幾年前のつきの夜に、
人氣とだえしこのやまの、
沼のほとりをたゞひとり、
泣きつゝゆきし人ありと。

知るや戀人、あしびきの、
みやまのおくの奥ふかく、
人氣とだえしみづうみに、
船漕き出てゝたゞひとり、
かくもはけしく泣くわれを。

雪をのせたる山のかげ、
旗にも似たるくものかげ、
皆來りてぞうつるなる、
夕のどけきみつうみに。

うのうつくしき影の中に。
あはれうき世のわつらひに、
やつれ果てたるわが影も、
うつりてあるなりたゝ〳〵に。

橋のたもとにかいまみし、
少女をけふもまた見んと、
わが訪ひくれどかけなくて、
むかひはる〳〵打わたす、
うのみつうみの水の上に。
うつるはあはれ星ひとつ。

まだ風さむきやまみちを、
こえて行くなる少女子の、
かざしにほふ岩つゝじ、
いつくの里にをりて來し。

ふもとの里のはるの日に、
早くも咲ける花のいろを、
見捨てがたくて少女子は、
をりてかざして來しならん。

あはれやさしき少女子を。
とはくも我は見おくりぬ。
みやまのおくにふけてゆく、
春のつかひのこゝちして。

園の清水

松　男

うの清水をくみあげて
垣根の花にかけつれば
さながら露となりにけり
君か心をくみとりて
あはれといひし言の葉ぞ
ついに戀とはなりにける

月の夜

松　男

月のひかりもあき風も
いたらぬ隈はなけれども
てらすは君がおもわにて
ふくは二人が袂のみ

君が小琴はわがふるは
いかなる音をか響きけむ
酔へる耳にはくりかへし
たのしとのみぞきこえてし

あはれ我身の我ならで

山賤ならばいかならむ
まくさ刈る手もたゆむまで
きみを戀ひなばいかならむ

琴のしらべにさろはれて
まがきの陰にしたひより
なく身なりせば如何ならむ
こよひの如き月の夜に

夕月夜

花　袋

ひさしく絶えし君にわれ
一目なりとも逢はんとて
きのふもけふも一昨日も

ちまたの中をさまよへり

君がかよへるみちをしも
われはいく度ありきけん
君のすまへるかどの邊を
われはいく度過ぎにけん

されどこひしき君はしも
姿とさへに見せざりき
其とおもひてちかよれど
似たる人のみおほくして

あはれいつくに君ゆきし

ひろかに君をこひしより
はや七とせになりぬるを
いづくに行きしあはれ君
あふことだにも今ははや
かなはずなりし己か身を
おもふたちまちわが袖は
なみだにぬれぬ悲しくも
その夕くれのことなりき
いとかすかなるゆふ月の
影を負ひつゝわれはしも
とある小路をあゆみゆく

をはりになりしわが戀と
はかなくつらき我世とを
思ひおもひてわれはしも
いとさびしくも歩みゆく
秋風さむきみちの邊を
右にまがれる折しもあれ
わがむかひより美くしき
ひとりの少女あゆみ來ぬ
ひかりもうすき月かげに
おぼつかなくもその人の

すがたをわれの見てし時
その嬉しさや如何なりし

あはれゆふづき心あらば
さやかにてらせ一昨日も
きのふもけふも尋ねたる
いとなつかしきその人を

鶏

藤村

花によりそふ鶏の
夫よ妻鳥よ燕子花
いづれあやめとわきがたく
さも似つかしき風情あり

姿やさしき牝鶏の
かたちを恥るゝありさまに
花に隱るゝ品かはりたる夫鳥や

雄々しくたけき雄鶏の
とさかの色も艶にして
黄なる口嘴脚蹴爪
尾はしだり尾のながくし

問ふても見まし誰がために
よそほひあらく夫鳥よ

妻守るためのかざりにと
いひたげなるぞいぢらしき

晝にてそかけれ花鳥の
それにも通ふ一つがひ
霜に假寢の朝ぼらけ
雨に入日の夕まぐれ

空に一つの明星の
闇行く水に動くとき
日を迎へんと鷄の
夜の使を音にぞ鳴く
露けき朝の明けて行く

空のながめを誰か知る
燃ゆるがごとき紅の
雲のゆくへを誰か知る

闇もこれより隣なる
聲ふりあげて鳴くときは
人の長眠のみなめざめ
夜は日に通ふ夢まくら

明けはなれたり夜はすでに
いざ妻鳥と巣を出でゝ
餌をあさらんと野に行けば
あなあやにくのものを見き

見しらぬ鶏の音も高に
あしたの空に鳴き渡り
草かき分けて來るはなぞ
妻戀ふらしや妻鳥を

ねたしや露に羽ぬれて
朝日にうつる影見れば
雄鶏に惜しき白妙の
雪をあざむくばかりなり
力あるらし聲たけき
敵のさまを懼れてか
聲色あるさまに羞ぢてかや
妻鳥は花に隱れけり

かくと見るより堪へかねて
背をや高めし夫鳥は
羽がきも荒く飛び走り
蹴爪に土をかき狂ふ
筆毛のさきも逆立ちて
血潮にまじる眼のひかり
二つの鶏のすがたこそ
是おろしき風情なれ

妻鳥は花を馳け出でゝ
爭鬪分くるひまもなみ
たがひに蹴合ふ蹴爪には

火焔もちるとうたがはる

蹴るや左眼の的それて
羽に血しほの夫鳥は
敵の右眼をめざしつゝ
爪も折れよと蹴返しぬ

蹴られて落つるくれなゐの
血汐の花も地に染みて
二つの鷄の目もくるひ
たがひにひるむ風情なし

そこに聲あり涙あり

爭ひ狂ふ四つの羽
血潮に滑りし夫鳥の
あな仆れけん聲高し

一聲高く悲鳴して
あとに仆るゝ夫鳥の
羽は血汐の朱に染み
あたりにさける花紅し

あゝあゝ熱き涙かな
あるに甲斐なき妻鳥は
せめて一聲鳴けかしと
屍に嘆くさまあはれ

なにとは知らぬかなしみの
いつか恐怖と變りきて
思ひ亂れて音をのみぞ
鳴くや妻鳥の心なく

我を戀ふらし音にたてゝ
姿も色もなつかしき
花のかたちと思ひきや
かなしき敵とならんとは

花にもつるゝ蝶あるを
鳥に緣のなからめや

おろろしきかな其の心
なつかしきかな其の情

紅に染みける草見れば
鳥の命のもろきかな
火よりも燃ゆる戀見れば
敵のこゝろのうれしやな

見よ動きゆく大空の
照る日も雲に薄らぎて
花に色なく風吹けば
野はさびしくも變りけり

かなしこひしの夫鳥の

冷えまさりゆく其姿
たよりと思ふ一ふしの
いづれ妻鳥の身の末ぞ

恐怖を抱く母と子が
よりそふごとくかの敵に
なにとはなしに身をよする
妻鳥のこゝろあはれなれ

あないたましのながめかな
さきの樂しき花ちりて
穴色暗く一彩毛の
雲にかなしき野のけしき

行きてかへらぬ鳥はいざ
夫か妻鳥か燕子花
いづれあやめを蹈み分けて
野末を歸る二羽の鷄

我がさほ姫の君に

松　男

君がこゝろの深き江に
一葉のふねをうけしより
うでぬれぬ日も我はなし

夢もよはせし朝しほは
いづれのひまに歸りけん

さゞ波さむき舟の中に
我たゞ一人のこるなり

まちわたりつる甲斐もなく
たてるや何の春がすみ
ほのかに見えし行末の
影をもうたてかくすらむ

限ある世にいつまでか
やるせなき戀を泣かんより
あはれかたみの花一枝
春のしるしにながしてよ
行きてかへらぬ水の上に

せめてはうれを思ひ出に
うき身を生みし川上の
はにふの小屋に立歸り
我をあはれむはらからに
其花見せてなぐさまん
君かなみだはあらずとも

離別

藤の花たゞうつふいて別れかな　越人

別れ路

馬場孤蝶

去ねよかし、わが少女、いねよかし。
うつせみの假のうき世に、
昨日のたつきけふのゆくすゑ、
夢をいでまぼろしに入る、
無常の闇に迷ひゆく、
たのむ方なき憂身のわれは、
世の終ふるまで光もなくて、

味氣なき日をなみだに送り、
遣瀬なき夜の鐘の音に、
あかつきかけてまどろまで、
喞ち明かさむ定なりとも、
恨みむかたもしらなくに、
朝な夕なにわが・むねの、
おもひにきざみしなが姿、
優しきなれが振りのたもとの、
薫はいとゞ身にしみて、
厚きまことのなれがなさけに、
あはれやあはれ幾そたび、
我悲しみの炎は消えて、
憂の雲の行衛もしらず、

樂しき日をば迎へしは、
何ぞ忘るべき幾世へぬとも。

櫻は散りて卯の花は、
まだ咲き出でぬはるのくれ、
古巣の谷の深山路に、
歸へりぞなやむうぐひすの、
はなの行衛を惜しむなる、
床しき音にやたぐひけむ、
汝が言の葉のわがむねに、
たへなるしらべを奏しは、
過ぎし彌生のころなりき。
すゞかせわたる朝ぼらけ、

夏の日影のまだてりうめぬ、
露いとしげき庭もせの、
千草にぬらす衣の裾、
たもとにしめす花の香の、
薫りや淺きあさがほの、
目さむるばかり美しき、
一輪つみてゑみかたまけて、
わが文机の片傍にぞ、
おくられにける紀念には、
夕の友と今もなほ、
身ぢかくひむる書のうちに、
いろあせたれどなか〳〵に、
捨てがたき香ぞ殘るなる。

萩の花ざかり虫の音しげく、
つき無き夕のはし居には、
われにもあらず言の葉の、
互にかはすかず添ひて、
更け行く空にさゑまさる、
あまの河原の岸に立つ、
ほしのちぎりのはかなきを、
我のみ胸になげきつゝ、
忍ぶにあまる言草の、
なが心に穂に出でし花のいろ深く、
ことにや寫りけむ、
もとだゑてうちなやむ、

優しきすがたのいぢらしく、
亂るゝ心のしらいとを、
如何にやうめてやみやせむ、
汝が思は淺くやあらむ、
ふかくやあらむと思ひかね、
打仰ぐ空はいとはれて、
星の光のかげ近く、
くもの行方はあともなし、
見かはす顔に笑ぞこもりし。
おもひ出れば一年の、
其は過ぎにし夢なれや、
賢き世にはすてられて、
なべて浮世のもろびとの、

こがねにたぐへ寶玉にかゆる、
哀に望みといふは消え行きて、
沈む身のはては、
まごころ厚きなが如き、
ゆかしき人のかたはらに、
長く住むべき縁は絶ゑて、
薄き契をうのむかし、
結び置けむ運命ぞうらめし、

むねの亂のいつしかに、
心も狂ひふるまねも、
暴ら び行きなむ身のすゑは、
天にうけしわが性なり、

なれなくも我は狂るはむ、
なれ止まるとも我涙は乾かじ。
いかで我なれを止めて、
長く〳〵、
悲しき恨に泣すべき。

いかに思ひてなどなれは、
我にやさしくふるまねし、
過ぎし情のうすくもあらば、
我はかくまで打沈み、

けふの別をなげかじを、
先日我につれなくあらば、
けふはこゝろもやすからむ。

否とよこれは過ちぬ、
我ながら愚のうらみ。
よよひしはわが身のとがよ、
恨むべきはよしなき胸の亂なり。

別れ路にこうなれはいと、
つれなくもあれ歎くわが身に。
やさしきながが笑顔、
穏やかなるながすがたに、
名残を惜しむその態の、
影だにあらばいかで〳〵、
とこしへまでも悲しみの、
消ね行く時のあるべしや。

遣方もなき我思、
穂にあらはれて何時とてか、
なれが心につゆだにも、
暗きかげ悲しき色の、
寫りしことのありもせば、
陰府に入るとも常久に、
盡くることなし我うらみ。
よしさらば今日の別の、
如何ばかり悲もあれ、
我は憂ひずひたすらに、
歎かじとこうつとめなむ。
ながが爲になにかをしまむ、
かなしき涙をわがのむも、

ながらへ樂しく世に立たんため。
わが永く遠き雲井の、
消えぬ恨をかこたむも、
汝が行末の榮へ行かんとてなり。
さらば我優しき少女
見返りもせで
行けよかし。
風は江を吹き渡り來て
わが袖にいと寒く、
雲は日をつゝみてくらく、
雨やくるゆきやふる。
すを立出でし雛鶴は、
あらし激しく浪あらき、
うみべを捨てゝ去よかし。

僧元恭を送る

鐵　幹

あゝ最爾たる小島國、
奇才を容るゝ地にあらず。
行けよ行け、
崑崙の山雪さえて、
恒河のながれ浪あらし。
丈夫稜々の俠骨を、
さらすに不足あるべきや。
一片の袈裟革命の、
血潮の旗に染め出でゝ、
慈悲忍辱の金剛杖、

太刀に代へむも面白し。
大我はやがて無我にして、
惡魔は菩薩の變化とか。
人を殺すも人を活かす、
佛意にかなふ道理あり。
曠世の志斗大の膽、
人は無頼と云はゞ云へ、
成るも成らぬも試みて、
斃れて後にさて已まむ。
はからず今夜相逢て、
呵々一笑す酒の前、
いでや盡せよ一杯を、
生別死別また問はじ。

さらば君

醉　茗

かたみに歌は通はせど、
稀にぞきますわが友を、
もてなす術も夏の日の、
うらみは氷消えやすき、

むらさき薄き筑波嶺の、
常陸の空に世をわぶる、
友のふみなど語りゆく、
二人のうへを星の飛ぶ。

君いますまに夏はて、

たびの衣をこゝろなく、
吹きやかへさむ浦風の、
秋てふ事を知りもせば。

君ゆきぬれば明日は又、
もとの心にしづむらむ、
世を忘れたるこの宵も、
はやふりかはる天の川、

送るともなく送られて、
霎時休らふかたびさし、
つきぬ思を句によせて、
唯さりげなく別れたり。

『早鮓の
なれぬうらみを
別れけり』

『君も亦
七夕の夜に
詩をつくれ』

うしろ影　醉　茗

せめてかぞでの一言を
告げ給ふとも誰かよに
咎めやするといつ迄も
君は怨まむさりながら。

言はで心のいとまごひ
人目の關にはゞかりて
夫と知らさで行く我に
つらさを後に覺れかし。

障りぞ多きうつしよの
ためしにもれぬ君と我
添はれぬ間を月に日に
したしむ末も恐ろしく。

戀ゆゑたつや旅ごろも
かくてしあれば我思ひ
增るのみなる苦しさに

知らぬ野山を獨り行く。

君が家居にちかよれば
袂ひかるゝてゝちして
一目見たしとたゆたへる
心のうこのかよわさよ。

いまはゆかんと顧（かへ）る
背戸の垣根に打なびく
柳のもとに立つは誰そ
君に似たりとおもほへど

はやくれかゝる空の色

朧氣ながらみまもれば
似たりと見しは實にて
あゝ彼の君ぞ立るなる。

胸の亂れのすべなさに
我にもあらで蹈出せば
裙は木の根にからまれて
ひやりとかゝる松の露。

打忘れけりふたゝびは
君にあはじと誓ひしを
思ひ返せばきみが名を
一聲呼ぶもまゝならず。

斯くあらんとも知らざれば
夕ぐれごとに二人して
數へし星のふたつ三つ
仰ぐや君のうしろかげ

是ぞ此の見をさめに
なりもやせんと思はれて
我玉の緒もこのまゝに
たゞよところは祈りしか。

里のわらべの唄ひつれ
此方をさして來かゝるに

心ならずもあゆみ行く
なはてはながし松並木

雜

夕暮の兀山ならぶ雲の峰　去來

四季

竹の里人

春

かすみながらに空晴れて
綠萠え立つ山の端に、
薄紅の衣輕く、

長き裳をいとゆふと
亂して空に靡かせつ、
吹かば消ぬなん御姿の
くはし女神ぞ立ちたまふ。

裾野をたどる少年の
菫げんげん摘みませて
行く行く造る花たばを
ひとりうち見て「之をしも
誰に贈らん。さりとては
誰に贈らん。贈るべき
人なかりき」と投げ捨てつ。

女神扇をふりかざし
ここへとばかり誘へば、
くしき力に人間の
恨もうさもうち忘れ
風に吹かれて道もなき
山の麓の芝生迄
歩むともなく歩み來ぬ。

おびただしくも蝶群れて
飛ぶと見し間に、少年は
酒に醉ひたるていちして
そこなる草をかり枕
すやすやところ眠りけれ
女神靜かに下り立ちて
袖をうびらにうちかけつ。
「いとし我君許したまへ。
君をここ迄招きしも
君を夢路にさうひしも
皆妾なり。はや月の
升りしに目ざめ給はずや。
君が捨てにし花たばは
掛けて妾の胸に在り。」

夏

白き袋に腰をかけ、
赤き袋を引きよせて

口を開けば炎炎と
ほのほは空に迸る。
うれを四方へあふぎつつ
ほほ笑む顔を日に向けて、
あやし男神や雲の上。

都はなれし野のはとり
車もよらぬ夕顔の
離くづれて茅ぶきの
家の奥まであらはなり。
今寝入りたる子の口に
喞む乳房をうとはなし
「今日や暑さの峠なる。」

竈の下を吹きつけて
煑え立つ鍋の蓋取れば
粟の飯か雜炊か
ふつふつとして湯氣上る。
「夫は遲し。子は如何に。」
待てば日暮るる門口に
イみ居れば鈴の音。

馬牽く夫東より、
徳利提げし子南より、
歸り來りぬ、もろともに。
「いざ風呂にめせ。荷卸して
すろして妾かひやらん。

酒ひややかに飯あつし。
くつろぎたまへ、蚊遣して」

白き袋の紐解けば
二布ばかりの裸身に
涼しき風の颯と吹く。
湯あみしはてし妻は今
櫛笥取り出で端居して
我子に向ひ「極樂と
人の歌ふは我が上ぞ。」

秋

たけなる黒髪肩にかけ
背釣り上げ眉ちぢめ、

凄き女神の只一人
絶壁の上の岩角に
足も危く倚り居つつ、
きつと睨めば人間の
桐の一葉ぞ落ちにける。

西の小窓にもたれたる
人は假寐の夢覺めて
物に驚く風情あり。
きのふに變る夕風の
膚に入みてやや寒み
蹶然として身を起し
仰げばいよいよ秋高し。

「丈夫天下の心ざし
今にして若し成らざれば
いつをか待たん。思ひ見れば
長くも我は眠りしよ。
我が心はや決したり。
泣くとも止らじ、さな泣きそ。
しばしの別離何かあらん。」

女神が白き裳に袖に
はひ上りつつ、岩ながら
八重に纏ひし蔦かつら
細きもろ手にたぐりよせ、

血の息はつと生臭く
吹くよと見れば、上葉下葉
もみぢせぬ葉もなかりけり。

雞を裂き酒を盛る
別れのむしろにぎはしく
劍を取つて舞ひ出でぬ。
「時は野山の秋たけて
見渡す限り錦なり。
行けよ、ますらを。世の中の
功名汝を待つ久し。」

冬

男神嵐に鞭うちて

木末木末を蹴散らせば。
楓柞のくれなゐも
銀杏も蔦も雑木も
一葉殘らず落ちはてて、
夕日にさはる影もなく
時雨にうつる色もなし。

髪はうはうと振り亂し
身にはあてなる衣を着て、
殘る紅葉の一枝を
手にかざしつつ狂ひ行く。
少女ははたと立ちどまり
今しも散りしもみぢ葉を
うらめしげにぞ拾ひける。

一足行けば又一葉
枝をこぼれぬ。うを拾ひ
一足行けば又一葉
二葉三葉四葉こぼれけり。
散るをば拾ひ、拾ふをば
うち重ね居れば又散りて
手なる小枝にものもなし。

「あら腹だたしロをし。」と
拾ひ集めしもみぢ葉を
虚空に蒔けばはらはらと

石の面に散りしきぬ。
しばらくそれを見つめ居つ
身を横へて其上に
袂かたしき眠るらん。

風の音をも忍びつつ
静かによりて恐る恐る
男神をとめを抱き起し
つめたき唇青き頬に
心をこめて接吻す。
やがてぞ男神立ち去れば
少女はがばと倒れけり。

髑髏舞羽衣

いづこをはかと定めなく、
ゆくをかぎりの旅の空、
露をあるじとたのみくる
かりねの夢も數うへば、
いつしかわれはみちのくの
やす島にこそつきにけれ。

行末とはき荒野路の
草の葉山ははてなきに、
心みじかき秋の日も、
尾花が末にいりぬれば、

しらぬ野山のいとゞなほ、
打たゞらるゝ折しもあれ、
露ふきむすぶ夕風に、
あなめ〳〵とねにいでゝ、
打みだれつゝなく聲の
ありかいづくと見てあれば、
わかこしあとの草むらに、
觸髏ひとつぞのこりける。
ひとむらしげきかや原の
根がたをつひのやどりにて、
みだるゝ苦にうもれつゝ、

いくその秋やへたりけん、
なかばゝやれしそのさまの
あるかなきかのあはれさよ、

國につくしゝますらをか、
世にあとたえしわび人か、
旅路の空にこいふして、
病みうせたりし人なるか。
いざことゝはんざれかうべ、
汝が見しさきの世やいかに。

答へがはなる荻の葉の
音まさるよと見るほどに、
まみの穴より一筋の

あやしき烟り立いでゝ、
たなびく末はたわやめの
花の姿となりにけり。

「あはれ旅人君が見し
都のやまも遠ざかる
ひなの長路のはてなさは、
空よりひろきすゝき原、
小野ともみえねさびしさに、
わか名をそれとさとらずや、

われかりの世にゐし程は、
君もろともに敷島の

やまと言葉の花ぞのに、
六つのひじりとはやされし
ふるきゆかりにいでや今、
かたりきこゑん身のむかし。

思へばはかなおのが世は、
只玉つらも定めなき
春をときはとたのみつゝ、
花より花にあくがれて、
憂としも果てをしらざりし
胡蝶の夢に似たりけり。

その世ざかりの頃ころは、

をとめすさびの一筋に、
かしらに玉をかざしつゝ、
袖にかさぬるあやにしき、
見る目もはつるありさまの
世にまれなりしめでたさに、

思ひかけたる雲の上、
君の恵しあまねくば、
もれじとこころは思ひつゝ、
われからわれと打たのみ、
人もなげなるふるまひに、
心たかくもありにしを、

なかれて早き年浪や、
しばしもまたぬせはしさに、
桂のまつもかけうめて、
わけのぼりつく老の坂、
わがあらましもみながらに、
あいなだのみとなりぬれば、

身をうき草のねをたゝて
いざなふ水もあらばとぞ、
思ひなりにしうのきざみ、
摺のはしがきかきつめて、
かよひし人の心さへ、
うつろひはてしうたてさよ。

櫻のはなの春雨に、
ちりゆく見てはおのが身の、
世にふるながめなげきつゝ、
死出の田をさのほとゝきす、
をちかへりつゝなくときは、
わびぬる世をばことづてき。

かゝりしほどにたちねも、
またはらからもあとたゑて、
とまりかねたる飛鳥河、
せにかへたりしわぎへまで、
われにもあらずあとに見て、

心もうちにまよひでぬ。

朝けの霜のいとひなく、
夜たちの露にしめりつゝ、
野くれ山くされさずらひし、
うきめのはてや今こゝに、
うつし契りもつきはてゝ、
土にぞかへるわがすがた。

君もろともに在原の
むかしおもはゞひとことの、
あはれはかげよ旅の人。」
いふなる聲も末ぎえて、

ゆふぐれうめし荒野原
荻のあらしとなりにけり。

籠鳥の感

晩翠

嗚呼青春の夢高く
理想のあとにあこがれて
若き血汐の躍るとき
人も自在の翼あり
自在の翼また伸びず
現の籠に囚はれて
餌に鳴音を搾るとき
狂ふ叫を誰れか聞く。

狂ふ叫もしづまりつ
籠を天地と眺めては
御空のをちも忘られむ
理想の夢もさめ果てむ。
こゝに囚はれこゝにやむ
あだし命の一時や
うたてうたかたうつゝ世を
我嘆かんや笑はんや。

むかしにて（五首）

雨江

門の谷川、むかしにて、

むすびし人は、影なし。
流るゝ水に　ことゝへば、
いはねに、獨り　むせぶなり。

門の柚山、むかしにて、
こりにし人は、あともなし。
しげるおぢろに　ことゝへば、
露のみ、千々に　散りまどふ。

門の袖垣、むかしにて、
むすびし友は、影もなし。
すがる忍ぶに　ことゝへば、
あさぢに聽けと　なびくなり。

門の櫻は、むかしにて、
眺めし春の　友はなし。
木ずゑの花に　ことゝへば、
風に悚へず、はら〳〵と。

門の山松、むかしにて、
あそびし友は、聲もなし。
しづ枝はづ枝に　ことゝへば、
あらしばかりぞ、ふきまどふ。

蒼苔を懷ふ

竹の里人

蒼苔去つて歸り來ず、

知らず吉凶今如何。
浮世を捨てゝ浮世より
樂しき處何處やらん、
霞の外か、日の中か、
西も東も天無邊。

塵の衣に千仞の
岡に振ひて、飛ぶ鶴と
共に空よりかけりけん、
人無き月に遊ばんと
雲に乘りけん、地に足の
跡も殘さず神のごと、

物思ひつゝ疑へば、
彼は惡魔にさそはれて
さまよひ出でしにやあらん。
忽然こゝに松繩手、
彼の姿は見ゆるなり
喘ぎ〳〵行く何目あて。

夕日は薄し。冬の日の
暮れなんとして、やう〳〵に
驛場に來れば、足凍え
指墮つるべきつめたさに、
北山。嵐ちら〳〵と
雪さへ吹きぬ、生憎に。

出女門に立ち出て、
右も左も聲合はせ
「おとまりあれや、旅の人。
暮れて雪降る此處の癖。
風呂もわきたり酒もあり、
夜着暖かに寢まらんせ。」

「夜着あたたか」と口の中
くり返しつ、、小淋しく
立ち止まるやためらふや、
＝魔は彼方よりさし招く＝
再び思ひ定めけん
高らかに詩を吟じ行く。

雪降る中を見渡せば
ほのかに遠き夜のけしき
白かねの庭、玉の森、
大野ばう〳〵限りなき、
人氣絶えたる其中に
あら面白の旅乞食。

何をたつきの一つ家、
見れば怪しき荒壁の
隙漏るともし慕ひ來つ、
「あはれみ給へ、これやこの
一夜の糧にかつゑたる

天地無宿の旅の者。」

只半椀の粟の飯
惜むも彼が浮世かな。
乞ふこそ人の無情なれ。
蘇武が喰ひし雪の花、
夷齊が蕨萌えずとも、
物なき腹に飽かばやな。

氣を勵まして分け登る
たふとき山の山深み、
雪に埋れし人一人、
頻冷え盡し眉顰み、

色無き口に世の中を
嘲る如き寒き笑。

浮世の飢に攻められて、
はかなしや亡き人の數。
蒼苔終にはてけるが、
魔に取られしか逃れ得ず。
屍の上にやゝしばし
見えて隱れぬ大坊主。

彼に死すべき罪は無し、
二たび三たび思へども。
必ず死せずいづくにか

彼猶生きて在り、爾かも
又目を閉ぢて見れば、彼
乗つて飛び去る峰の雲。

人間ならぬ草や木の
園あらはれぬ。高き棟
霞に聳え、清き池
鴛鴦遊び、玉黄金
敷き並べしは天上か
畫ならではまだ得こう見ぬ。

長十丈と詠みにけん
蓮の花の花びらを
舟に浮べて、右左

さすや天女が水馴掉、
中に座りし蒼苔の
手に躍り入る奇しき魚。

渚に著ければ、水際に
大輪の花、其白さ
透き通るべき中に又
黒き蘂あり、葉ゆさ〳〵。
「花に不思議の奇特あり。
試みに折れ、思ひ草。

君が心に思ふこと、
まぼろし寫す空の影。

一もと折りて、一心の
祈念を凝らし手に捧げ、
天を仰きて、花に置く
露を小雨とふりそゝげ。」

指し示されし花折りて、
うれと見やれば、雲煙
隱々として、世の父を
見たてまつるよまのあたり。
其枕邊にこは如何に
大蜘、小蜘、群れ居たり
たゞ事ならじ父はさて
病み給ふかとつおいつ。

「さな泣きそ、現、ならなくに」
天女靜かに肩を拍つ。
憂忘草かざゝせて
折りて與へし花一つ。

まぼろし失せて、何事も
思はぬさまに、ひとり今
何處とも知らず美しき
草踏み分けてありくまゝ、
遙に見ゆる野の末に
綠青塗りし春の山。

鶺鴒人を導くか、

導かれつゝ、沿ふ流れ。
勞れて石にやすらへば、
氣高き童子、籃に入れ
三千年の桃の實を
さゝげて立てる夕間暮。

忽ち月は昇りけり、
童子の歸り去る處。
ゆかしき匂ひ空に滿ち
ほのかに光る物の色
夢の如くに陶然と
心弛めて來る禿。

「主なる人のたまひし、
歸り給へ。」と道の露
玉散り乱し、もろ共に
入る門の内、樂聞ゆ。
閣に上れば燭の影、
うづ高き髷、細き肩。

蒼苔今は天上に
穢土を忘れて樂むか、
跡追ひ行かんいで我も。
飢に勞れて惱めるか、
早く救はん、我行きて、
人なき山の雪の中。

いかになるべき清浄の
身を保ちたる人の末。
惡きが故に罪も得ず、
幸も得ず善きが故。
うたての浮世怨み居れば
ともし火消えて鐘の聲。

中野逍遙をたもひて　佐々木信綱

川べのやどにまとゐして、
かたぶく月をあふぎつゝ、
心しづかにかたらひし、
四人のひとよ今いづら、

さかゆく春をほこるあり。
さびしき秋をかこつあり。
君はつめたき世をさりて、
われはつれなき世にぞ泣く

わが友　獨歩

わが友思ふ夜なりけり、
夜ふけて空の星とびぬ。
をのが力のあまりてか、
星は軌道をつきいでぬ。
怪しの光はなちつゝ、
しばしたゞよふ程もなく

地平線下に隕ちうせぬ。
其夜の夢のめ悲しさよ。

獨歩

彼君

絶えて久しき彼の君を
夢に見ざりき、はからずも
昨夜の夢はさちなりき。
林の奥に小路ありて
かの君思ふ夕ごとに
あゝ幾度かさすらいし。
今朝起きいでゝ訪ひ來れば、
木の間をもるゝ日の光、
秋は梢に來たりけり。

仰ぐ日影のうつくしさ、
さろふ涙の怪しさよ。
秋の光の身にしむか、
はた君思ふゆゑなるか。

羽衣

うたかた

露じもさやぐ秋の夜に、
家もる犬の聲たえて。
ねやの板間をもる風の、
枕にさゆるをり〳〵は、
今のうつゝといにしへの、

うの中にしもながれたる、
夢のわたりを打こえて、
すぎにし世々にかへるなり。

いのちに戀ふるたらちねも、
しのびわたりしはらからも、
わすれゝまなき友どちも、
したに思ひし戀人も、

うちとけすがたなつかしく、
ゐみかたまけてむかふなる
昔ながらのありさまは、
こわねもかをるこゝちして。

あはれ人々もろともに、
ながめし花の末いかに、
くるはどなき春の夜も、
またでちりしにあらざるか。

あはれ人々もろともに、
かけしのぞみのはていかに、
よろづがなかの一つだに、
とげで絶ねしにあらざるか。

思へばなべて人の世も、
望の露にはぐゝまれ、

戀の雫にうるほひて、
咲きにし花のひと時よ。

惠あまねき朝日かげ、
のぼればあふぐ大空の、
高き心に末の世の、
さかえをまちてありにしを、

かぐろき髪も白河の
岸によりくる老の浪、
ながれゆきてはかへりこぬ
むかしがたりとなりにけり。

さもあらばあれかりうめの
むつびはしばしたゆとても、
夕べをまたぬうつし夜の、
やがてもつきむろの時は、

夜のうきふしをのがれでゝ、
こゝらみちたるたのしみの、
つくる期しらぬ樂園に、
へだてもあらず打つどひ、

春はふりしく花のもと、
秋は眞如の月のかげ、
手たづさへて駒なめて、

心のまゝにあそばまし。

母の遺骸にむかひて　鐵幹

吾妻の旅路はるばると、
比叡の麓にかへりきて、
わがやを見れば玉床の、
外をむきます母の顔。
あはれ終には誰も行く、
道とは兼ねて聞きしかど、
歸れとふみをたまはりし、
きのふやうつゝけふや夢。
夢のさめますことともやと、
床の邊さらずさもらへば、

すきもる月のかげ痩せて、
壁に來て鳴くきりぐす、
おなじあはれは露の身の、
消をあらうふ夜のさまか。
袖のよそなる木がらしの、
いつ音づれてさうひけむ。
よべと歎けどたらちねの、
長きねむりはさめまさず。
ただのひと言わが名をも、
召したまはざる悲しさよ。
おもへばこゝに拾餘年、
西にひがしにさまよひて、
みろば遠くもはなれたる、

わが罪いかに深からむ。
せめて一度はともなひて、
都の花も見すべきに、
旅の憂目を聞かせては、
いくたび母を泣かせけむ。
名をあげ家を興せよの、
そのみをしへは忘れねど、
狷狂人に容れられず、
世わたる道のつたなくて、
思ふところの一つだに、
猶なし遂げぬくちをしさ。
母の御魂よあはれとも、
わが子の姿みそなはせ。

かなしや秋のながつき月は、
ながき恨の名なりけり。
荻の下葉をながめつつ、
ひとりある身と成はてゝ、
夜寒はいとゞまされども、
袷衣を着する人もなし。

この世にはさらでも恥の多き身を
あはれ今より母なしにして

母を葬るのうた

藤村

きみがはかばに
黄菊あり

きみがはかばに
榊あり

草葉に露は
しげくして
おもからずやは
うのしるし

いつかねむりを
さめいでゝ
いつかへりこん
わが母よ

紅羅ひく子も
ますらをも
みなちりひぢと
なるものを

あゝさめたまふ
ことなかれ
あゝかへりくる
ことなかれ

春は花さき
花散りて
きみがはかばに

かゝるとも
夏はみだるゝ
螢火の
きみがはかばに
飛べるとも
秋はさみしき
秋雨の
きみがはかばに
うゝぐとも
冬はましろに

雪霜の
きみがはかばに
こはるとも
とはきねむりの
ゆめまくら
おそるゝなかれ
わが母よ

晩翠

墓上の花

死と悲と恨との
跡を留むる墓の上
美と喜びと命との

心を示す花一つ。

光、あけぼの、來ん年日、
望の影を彼は見せ
暗、夕まぐれ、過ぎし年、
涙のあとを此は見す。

色ある花の聲や何に
聲なき墓の意味やなに
同じわしたの白露を
彼と此とに落ちしめよ。

憂の墓は人のあと

命の花は神のわざ
同じ夕の星影を
彼と此とに照らしめよ。

墓　　花袋

畫もをくらき杉むらの、
小笹かくれにいつの世の、
誰か墓ならん二つ三つ、
倒れてまゝにのこるなり。

あはれその墓見るごとに、
我は憶はぬことなき。
幾百とせの前の日と、

幾百とせの後の日を。

山中の石

與謝野鐵幹

「ふるく頑たる山の石、
敲かば我も聲あげむ。
この聲よしや人間の、
少女の絃にのこすとも、
達人耳をかたぶけて
きかばなか〳〵中空の、
星の都にありときく
一百五絃の玉の琴、
嵐の神の音づれて
一時に裂くの概あらむ。

何を求めてさう〳〵と
水は小川を流れゆく。
誰を待ち得てかいかいと、
鳥は林を啼きめぐる。

世に同調の知己なくば、
起き出でゝ將た何かせむ。
我は寐ながら萬年の
風雨に夢も破らせず、
神の加護ある無始の世の、
破格奇想の詩一篇、
苔のみとりの薄絹に

包みて山に獨り臥す。」
世の詩に飽かぬ友よいざ、
行て太古の石に問へ。
かれは雲ゐる深山より、
曾て此語を寄せにけり。

故　徑

藤　村

ゆふぐれかぜのすゞしさに
よのわづらひをのがれきて
むかしなれにしみぎわなる
ふるきにみちをたづねけり
われあまたゝびたびにねて
さみしきてらにたづねいり

よをはなれたるかべの面に
ふりにし彩をみてしごと
おりしづかなるわがこゝろ
むかしのゆめに沈むかな
見よはちす葉はみづをいで
みどりの笠に似たれども
醉ひかざしつうたうべき
秀でしすはいづこぞや
しげれるくさをわけいれば
はたるは亂れ人去りて
香のみはうれとじるけれど
花はうもれてみえわかず
とりはねねりをいそぐとも

われはこみちにわかれかね
深き夕日に照らされて
わか身を分けし影を踏み
いともさみしき木の下を
あゆみあやうく遲々として

やぶれ琴

雨　江

柴こりくらし　歸へる子の
笛の音とはく　かきくれて、
あらしになりゆく　み山べに
今宵も、月はすみのぼる
誰が思ひ入る　奥山の
しのぶ小琴の　音なるらん、

吹きしく霧に　しめればや、
いともかすかに　かよふなり。

ふもとの谷に　吹き沈む
嵐と共に　音は消えて、
いはねにかゝる　瀧の糸の
しらべて、獨り　すみわたる。
よわるとすれば　吹きあれて
木の葉を下す　山かせに、
また一しきり　はら〳〵と
ゆかしき音の　きこゆなり。
いぶかしみつゝ　とめゆけば、
ありし音色は、　またきえて、

かなたに遠く、　さをしかの
今ぞなく、なる、つまどひに。

なほわけゆけば、一しきり
おとろにさや立つ山風に、
またさや〳〵と、琴糸の
いよ〳〵亂るゝ音すなり。

いづべの里の　つま琴を
こたへやすらむ、山彦が
ひゞきは、またも　かき消えて
なくやふくろふ　聲さむし。

いよ〳〵のぼれば、いやちかく
一むらしげる　笹かくれ、
またきこゆなり、琴の音は、
露ちる風に　亂れつゝ。

聲するまゝに　わけ入れば、
笹野は、もとのまがきにて、
いつより嵐に　まかしけむ、
まはらに殘る　かやが軒。

むかしはすみも　つれにけむ
秋の夕の　月かげも、
やつれはてにし　窓のべに、
誰が殘しけむ、あづま琴。

誰が手ならしの　あづま琴、
なれに人は　いかにせし。
誰れにおくれて、なれひとり
あらしの宿に　むせぶらむ。

絶えぬばかりに、琴糸は
一きは悲しき　音をあげて、
たまらぬ軒の　よあらしに、
またもや、　しのにみたれゆく。

はてなき海

獨　歩

月の光にさゐはれて

大海原をだゞよはん
とこよの岸は何處ぞや
うよぐ潮風こゝろせよ

はてなき海と思ひてし
いにしへ人はさちなりき
雲井はるかに見わたせば
波のかなたはてもなし

わが帆ゆたかに朶みたり
月はさやかにてらすなり
そよぐ潮風こゝろせよ
とこよの岸はいづこぞや

波に碎くる月影は
　常世に通ふ路なるか
月に漂ふわが舟は
　空に浮べる雲なるか

空や海なる海や空
　吾や月なる月や吾
われは常世の民にして
　常世は今のうつゝなる

わが帆ゆたかに孕みけり
　月はさやかに照らすなり
常世の岸も程ちかし

うよく潮風こゝろせよ

俚歌に擬す

正岡子規

俚歌の中に子守歌、及び小兒の謠ふ歌は言葉ひなびたれども面白き節少からぬを、小學校に唱歌を敎へしよりやう〳〵に唱歌行れて俚歌は跡を絕たんとす。なか〳〵に唱歌よりも俚歌に文學趣味多きを思ふに其全く世に忘られんことも口をしく、此頃幼き時に覺えたる歌の忘れたるを老人に聞き正して書いつけ見るに、一入興に入りて終に其口まねをとこゝろみける。吾は韻語の自然ならぬを笑ふ、人は事の益無きを笑はん。

其一

ねんねやをころりや。
ねんねの坊やは誰が子ぞや。

お城の上の星の子か、
南の海の河豚の子か。
坊やを產んだ母の子ぞ、
坊やを抱いた母の子ぞ。

其　二

ねんね〳〵や。
ねんねの坊やは何を泣く。
泣く子は鬼が連れて行く。
坊やは大人ぢや泣きはせぬ。
坊やはあすから學校行く。

其　三

大凧あがれ、　天迄あがれ。
天から落ちたら　柳にかゝれ。

柳の枝に　三羽の鷺が
みんな逃げて　しまつた。

其　四

雄蝶舞へ〳〵、　雌蝶を連れて、
雌蝶ひら〳〵、　雄蝶を追ふて、
麥や菜種や　大根の花や、
大根飛び越え　向ふへ行くや
右は小雀、　左は惡魔
中にぐる〳〵　大水車、
行くな遊ぶな、　又舞ひ戻り、
もとの菜種に　夢語り〳〵。

其　五

物は話よ。一人旅、

原にかゝれは飛ぶ鬼火、
道に迷ふて夜は暗し、
行けども〳〵村は無し。
遠い明りをつけていて、
一軒家を見つけて、
内の様子を見て居たら、
門へ出て來て女ばら、
おとまりあれや若殿衆、
濁り、燒酎、古酒、新酒、
酒の肴は何よかろ、
松茸、初茸、米松露、
北の畠の芋の子、
西の海のにしの子。

一夜の宿を借りたれば、
草木も眠る夜半ば、
芙蓉のやうなお姫様、
白無垢、緋無垢、緋の袴、
左の足をそつと出し、
右の足をそつと出し、
そろり〳〵とよつて來て、
行燈の下にすわつて、
長柄の銚子右に取り、
金の盃酒を盛り、
一河の流も緣のはし、
酔ふてくつろぎ給ふべし。
いや〳〵それは勿体ない、

我々下司の見苦しい、
飲まぬと言へど、飲み給へ、
ふつと消えたる御姿、
薄の下に夜が明けた。

其　六

昔おれのかゝ様が
四國遍路に行く道で
病氣とやらで死なれたが
戀ひしユて〳〵、こゝへ迄、
喰ひつき犬に吠えつかれ
とろ〳〵坂でころんだり、
驛の宿屋でことわられ
しヨぼ〳〵雨にふられたり、

わらじ、菅笠、旅の空、
來たこと來たが、苦深く
蒸したお墓のどれぢゃやら
賴むは大師のおん利益
これにも信女と書いてある、
こちらの信女がうでであろか。
われにも信女と書いてある、
あちらの信女がうでであろか。
お墓は野邊に出る處、
戒名も無いといふうわさ、
大方こゝの石であろ、
咲いとる花が母子草。

漁翁の娘

大野洒竹

なんぢめでたき小娘よ
小舟こぎ寄せ陸にまで
來れやこゝに我が方へ
ともに語らむ打明けて。
おけよ首を我が胸へ
恐れないたくられまでに
うもじは日ごと荒海へ
心おきなく出でつるに。
我心こう海のごと

潮滿ち退きて嵐吹き
清き眞珠の數いとど
心の底にひろむなり。

淡路少女

大和田建樹

ともし火の明石の浦に
ただ向ふ淡路島山
舟子にも此身をなして
明暮に行きかよはんと
夢の間も戀ひしは昔
吹く風に何ことづてん
飛ぶ島も何うらやまん
我母は今は亡き人

霞たつあの山もとの
松かげに獨ものいはぬ
石をのこして

雜

鐵　幹

岡村氏の囑により、故猩々曉齋の女なにがしの、お玉が池の故事をかきたる圖に題す。

あゝいぢらしく美はしき
お玉が池のまたの名や、
櫻といまも世にかをる
むかし語りのあはれさよ。
情に狂ふますらをの

兩人の太刀に身をかへて、
清きみさをの名に負へる
玉とわれから碎けけん。
同じ例しといにしへの
眞間のつぎ橋かたりつぎ、
あはれ知りたる世の人に
ながき恨を忍ばるゝかな。

梅花鶴瘦堂に題す

萬梅はなひらいて水清し。
鶴一聲月のぼる。
しつかなるかな天地に、
ただ二人あり神と我。

附　録

新體詩に就きて

格文堂主人

こは稍や事ふりたるに似たれど、聊か大方の見參に入れまく思はゆるまゝになん。

詩歌改良の論も、今は早大方の是認する所とはなりつ、曾ては隨分拮抗諍論の喧しかりしといへど、今は當時に擬古文派、守舊派なんと呼ばれたりし人々さへ、口には流石なれば其論も曲けあへねど其歌ひ出づる歌どもは自然時流に落ちつゝあり、又彼の改進主義者たりし人々も、不智不識の間に己が持説の幾分を折りつゝ、守舊派の使用語を死語よ耳遠き語よと叫べりしとも、はたと打忘じたらむが如く、但しは其當時に耳遠かりし語も今は耳馴れてや、死語も蘇生しつ復び活語となりたればにや、うの死語たり耳遠き文字たりしものを今は競ひて使用する樣なりき、されど深く考ふれば、當時に擬古派など呼ばれしは其實虛構にて絶えて去る絶對的擬古主義の人は非さりしと見えたり、またよしやありしとても更に殊々數數へ立つ可き程のものにては非さりしならん、されば彼詩歌改良の論は殆んと一般の所望なりきと謂つべきなり、我れも亦詩歌改良の必らずしも不可なる可き理由を知らねば、其應に改良せさる可らさる因緣の有て存せば敢て其說に對て抵抗を試みんとはせざるべし。然れど我は此事に就きて爰に一言贅せんとするとあり

抑も今の所謂新体詩は彼の詩歌改良論の具体的に顯現したる者にして則ち彼の論の權現にぞありぬべき、而して其新体詩ぞ此

春以來は殊に一入熾りにて、「詩形もはた稍や見るべし」と『早稲田文學』は謂ひぬ、實詩の外形皮相はいと痛ふ進歩しぬとぞ思はゆれ、『早稲田文學』が引きたる證歌など洵に其實を證するに足りぬべきや、偖又同誌の言によれば人皆が其長篇を作するは『やゝ複雜なる思想の歌に入りそめしにも因るべけれど多くは新体叙事詩を興さんと欲するに原因せり』とか實我も其言の誣ならざるを觀る、されども今こそ初めて其姿を現はしたるなれ、今までは必らずしも去りともとは一定せられさりけるを、偖去らば其かみ所謂新体詩を起さんとて先づ起りぬる詩歌改良論なるものゝ論據は如何にか有りけん、大方は早業既にぞ知玉はめ、いで其要點はととはゝ唯複雜なる思想を表白せんが爲めに日本には叙事歌に乏しきが故に、てゝに新体叙事詩を起しつゝ我が大理想を唄ひ出でばや、と云ふ一事にぞ歸す可き、されどても今

になりて其衆說を總括してのとぞ、則ちこを細目に渡りて說かは更に幾條を增すべく、或は又其前一句を執りて說の根幹とし之に枝葉を附して主張するもの、後句に手足を附して說くものなと其說樣々にて限あるべくもなかりしを、今は其內にて後說の勝を制してや、彼『早稲田文學』、をして上述の如く言はしむるに至りぬ、

實今は其新体歌の勢力いと勁くして所詮一ト渡り計の微風の吹きたればとて輙く靡くべうもなければ、今はなか〳〵慾ひに言ひ出でぬかた、まさ樣にも聞ゆべき去れど我倩々其理りを稽ふるに何故に人皆は斯くまで從來の和歌を厭ふやらん、けに卅一字の短歌は、我が國の陀雜尼うと言ふなれば善きに詠み出でなんと難く惡し樣ならば面白からぬ習ひなれば、世の人も聽て厭きもしなゝん、去るにても彼の長歌は何故に世に疎まれしぞ、

國語に深からぬ人々の爲めには稍や不自由の傾きのあればか、さらば今樣格は文字苦しからず如何にぞや、論者は謂ふ單調なるが憂しと、されど今日の新体詩は如何に、果して其單調を免れ得たりけるか雨江氏の『深山の美人』も七五調六句節、（中に作者の都合にて七句となりたる節も見えたれど）、五十七聯なり、『大和撫子』とても唯其節數の少なきのみなり（廿一節）、こ度『帝國文學』第二號に出でたりし、羽衣庵が『墨染櫻』も七五調聯なり、たゞ段を上中下としたるのみ、また同號第壹號なりし、しのぶが『田舍の夕暮』も七五四句節十五聯にて、物集氏のも七五たると同じく、（『國學』第二號）、殘花、殘月、等のみな同じ（『國民之友』附錄）、七五調は殆んど一般の是許する所となりぬと見えたり、『帝國文學』は謂へらく、「七五、五七、等舊襲の外、五三、六四、八六、九八、其他の諸種の長短句の最近年の間に試みられたるも

の一二にして足らず、而かも槩ね失敗に終らざるはかりなり」とて何故に我國人は七五、五七、等の平弱單純なる調を省みて他を捨つるやを怪めるに非ずや、然らば即ち人皆が從來の長歌今樣を愛さざるは應に其調のユニチーなるが故に因るに非さるは如何にも著るきとならずや、然り其因緣は正しく他にあるべし、即ち其詩形の惡しきにはあらで、重に從來歌人が世のローマンス的及びヒストリ的材料を唄はさりしを怨みとするに外ならざるべし、先に擧示する所の『深山の美人』も『墨染櫻』も『靈鷹高千穗』『霜夜の月』も『壇の浦』『田舍の夕暮』も亦た咸なかの、小說的、歷史的、材料に依りて成れるを看ても其然る所以いと明かゝらずや、けに〳〵全く而なめめり、果して然らば今の新國歌を創作せむとの主旨は彼『早稻田文學』が謂へりし如く全く此種の長篇叙事歌を作り出でなんとするに外ならざる可し、

大方の新國歌創作の目的果して爰に存すとすれば我は私に恠訝措く能はざるものあり、ろも什麼故にさしも饒くの詩家が咸左程までに長篇叙事歌を羨望するにか、我は敢て所謂新体詩に對て怨恨を懷くものにあらねば、新叙事歌の創作を必ずしも否定も是定もせんとする者ならずと雖、彼の小説的長歌が乏しければ何故に悲しきぞ、又何故に長篇叙事歌がさばかり戀しかる可きぞ、東西完具もて自から任せんとする我國に其乏しきはいと口惜しとにか、されど用なきものを止めんは無用なるべし、用ありとせば何の用かある今やあらゆる叙情的詩題を唄ひ盡して（こは非我言）其命脈正に絶ぇなんとする我國の詩歌の其命脈を持續せんが爲めに奚に其客觀詩を提出し來らんとするか、我は思ふ其客觀詩なるものが任ずる所の題目は必らずしも我詩歌の擔當すべき限りにはあらじ、彼等の主とする題目の多くは、こ

れ戯曲、若しくは小説（非謠的）の正に含むべき所のものに非ざるなからんや、作者は皆彼七五調の長篇叙事歌を奚如せむずる考へなる乎、『深山の美人』『墨染櫻』、（此二篇は近頃出色の者とぞ言はるなる）など小説として極劣れるもの丶數なるべく、謠はんには謠樣こうあらめ、如何にして謠ふべきか、劇（廣義）に上らしめんとするにも素より法なからむ、所詮誦讀一番去るの外手段なくされど偖てはしまた口調の單一に陷入らんを如何にすべき、着想とても更らに新奇と見ゆる節あらず、彼等もて複雜なる思想を唄ひ出でしものなんど言はむか、昔への人とても、なとかばかりの思想の莫かるべき、ありたむなれどうを唄ひ出でむも詮なしと思ひて唄はざりしならむ、我は他の長篇叙事歌が如何なる點に於て如何計の價値を有するかを知るに苦しむ、『早稲田文學』も『深山の人』を援きて其詩形は稍や見るべしとて、其措辭

のやゝ整ひたりといふ意を示しき、彼等は措辭の他に取る可きなきか、我は幾重にも長篇叙事歌は如何に有難さかを識るに苦しむ、去れど人は謂はん然らば我が從來の詩歌は驕てたゆ可しと、我胡ぞ其絶ゑなんとを悲しむものならむや、玉の緒よたえなば絶へぬ存命らへば、しのぶるとのよはりもぞする、我奚ぞ其絶命を惜まむ、彼は神代の遺物なりけり。

然れども此歌や、我が思ふ絶え果むとは甚だ近かる可からずと人の想にして若し存せば遂に朽ち果つ可からじ、今の歌に傑作の出でさるは敢て其形式の不可なるが故に非されば、なりされど其脚色に傑出せるものゝなきは獨り作者の罪にはあらで畢竟造化の罪ならずんば非ず何となれば社會現象及自然界の凡ては吾人に向て新題目を與へさるに由る又例へそを送り來るも其等の作家をして秀想を唄はしむべき天才を賦與せざればなり、今日

の詩人歌人は其實其分を盡しつゝあるなり、曷ぞ其罪を作家其人に歸す可けむや、

されど其歌ども、所謂新体詩も、所詮今の姿にては止むまじ、我は未だ其進歩の餘地の存することを信ずるなり、民友社は專門家ならぬ詩人なんど荐りに呼ばへど、今の歌界か賑かなる割合に其進歩の著るからねば必竟其非專門的詩人？の滋殖するが致す所にして、繁昌は反りて尨茸渾淆を來たし、純粹歌界を紊亂するに至るなり、非專門詩人なむどは歌界の大賊なり、又現今の歌は多く軍歌を作すれど戰爭なんどには必らずしも純精の神は宿からぬものを、唄ふは忠と義との端のみ、うれも驕ては例の千篇一律ぞかし、故に總て其題目は務めて之を平和的に求めざるべからざるなり、以上所述其言や太た陳套なるの嫌なからずと雖も、世の餘りにエピツクを優遇するが訝しさに、爰に

彼此打交せ一言を贅するなり

新體詩の近況

いくたび廻るも同じ圏を廻るなり、いくたびあげつろふも同じ言を繰り返えすなり。新体詩の現在及將來はいかゞならんか、小六つかしき批評に浩識をてらふ儕輩は之を度外し、大人才の出現は之を例外とし、所謂新体詩人なるもの丶吟詠について觀察し來れば、心細さの感なくんば非るなり。しかもいくらか希望なきにしも非す、いくらか進歩の跡なきにしも非ず。

一昨年より昨年にかけて一時勃興したる氣運は、戰爭已み、喇叭の音きこへずなれると共に、今は遠雷の幽かなる反響をもきかす成りぬ。これ今の詩人なるものに一定の方針なく、獨得の

主張なきにも依るべしと雖も、羽翼心に添はず、飛翔自由ならざるにも因す可し。然るに議論の題目に苦める批評家は、大袈裟にも、何が故に叙事詩を出さゞる、何故に長篇叙情詩を歌はざるやなど、蚊に泰山を負はしむるが如き相談をもちかくるが故に、詩作家やゝもすれば、時期の未た熟せざるを知らず、新体詩は到底駄目なりと爲し、よしんば到底乃公如きものの力に能ふ處に非すとし、即ち筆を擲て興もなき短篇小說に走り、見識もなき評論文に逃る。かかる自信なき儕輩はいかに精勵すればとて、ミューズの衣の裾にたに觸るる價値なかるへしと雖も、或は自家自ら知らざるの才を有し乍ら、新体詩其自身の成熟期にあらざるを察せす、凡て自己の不才の致す處とし、やがて頭を他に轉じ去るものなきにしも非ず。わづか一年二年の間に、新体詩人と云ふ新体詩人が、揃ろいも揃ふて何處かに閉息し居

れるを見れば、あながちに僻見にも非るべきか。『小夜砧』に榮名を博したる武島羽衣子の如き、詠懷賦誦、時に人意を強ふするものなきに非す。さればとて此人の獨得の長處たる擬古体夢幻体は、果して將來の詩壇に勝利を博し得べきかこれも疑問の一なるべし。湖處子の如き近時何ぞ奮はざるの甚しきや。鐵幹此頃『東西南北』を上梓して、聊か得意なるが如しと雖も、寧ろ五言古詩の飜譯とも見るべき此人の詩体も甚だ覺束なかる可し。大西操山氏は久しく歌はす。吉郎博士『百猿』的の謔詩に流れ、『誰が子』『花めせ』の高調を聞かざる此に數年。戸川殘花子何の想ふ處ぞ、近頃は又得意の新体詩なし。美妙は素と詩人に非す、雲峰とやら曰へる人も、米國にて金儲けにいろがはしとぞ。所謂專門詩人なるものゝ賴もしからざる、又甚しと云ふ可し。

かく曰へはとて我輩は明治の新体詩を根より葬り去らんとするものに非ず。我輩は素と所謂專門詩人なるものに多く屬望するものに非るか故に、却て此頓挫を自然の傾向とし、大に新顏新体詩人を歡迎せんと欲す。近頃新聞雜誌に瞥見せる新体詩に就て、直に彼此と判斷を下さんはいかがなれども、少しく思當れる事共を述べんに、我輩はそれを三種に分類して觀察するの便なるを信す。

（一）天然生物を化人（バルソニフアイ）する詩体

英國にてにトムソン、クーパー、バルンス等最も此詩体を採用せしは何人も知る處也。冬夜の羊を憫み、鋤き返へされし二十日鼠を謠ふなど、此体の詩は何れの國の文學史にも一時代を占むるものなるべし。二三年前上田萬年氏が『故郷の夢』に、百合花に思を曰はしめしが如き、當時の詩壇にては、少しく異樣清

新の感ありしが、此はゲーテの『小河』など曰ふ樣なる短詩の流を汲めるものなるべく、今日の處にては我詩壇にても此體の詩歌甚だ少しとせず。例せば大町桂月子が其『ひとよ竹』に歌へる『松杉問答』も此派に屬すべきものならんか。

松杉問答　（帝國大學）

山もとに　おへる杉の樹
いたゞきの　松にかたらく
我はしも　谷にうもれて
照す日の　めぐみにも洩れ
世の中の　さかえもさちも
よろにして　年をへつるに
白雲の　うへにそびえて
天の下　ゆたに見下し

世の塵を　遠くはなれて
日の大空の　神にも近く
ひかりたゞにさすらむ
なれこそは　うらやましけれ

峰の松　こたへけるやう
高山も　世の外ならず
とりよろふ　岩根こゞしく
とときじくも　み雪つもりて
夏もなほ　吹く風さむみ
幹まがり　枝もちゞむを
大空の　あらしをよろに
たけ高く　直く生ひたち

谷川の　清きながれに
はびこれる　根もうるほひて
やすらかに　世をすごすらむ
なれこそは　うらやましけれ

猶『ひとよ竹』中の『巣立つ雛鳥』も此類なる可し。又同じ大學派の鹽井雨江子が、本誌第一號所載『しほれ草』中の『松と菫』も、桂月子のと躰を同ふするものなり。白百合第二號に編める『蝴蝶』も先づ此躰ならんも、うれは譯なれば兎角の評なし。青年文のふみをなる人の作は此分類に加はるべきものならん。

行春の小川

里の小川の岸ひくゝ、
一トもと咲ける花すみれ、
さかりの春は夢にして、

時絶間なく行く水の、
鏡にうつる色あせぬ。
水上遠く折からや、
うすくれなゐの花二つ、
末をいづことしら浪の、
よるがまに〳〵流れ來て、
さすがろれとやたゆたひぬ。
いづれうきみの我友よ、
終にゆくべき旅路なり、
しばしの名殘惜しくとも、
ともに行かずや天地の、
むかしに歸る身にしあれば、
さろへばやさし花菫、

散るやはら〳〵殘りなく、
浮ぶ小川のよる浪に、
またさや〳〵と聲たてゝ。
赤き紫打まじり、
後れ先だち流れ行く。

總じて此寓感化人躰は、動もすれば『イソップ』じみたるわけもなき囈語に類するの傾向あり。一句の段落、一字の投感に、無限無量の詩味を含ましむるに至らざれば、此躰の詩の成功は殆んど望みなからん。

（二）戀愛の詩　不健全健全の論やか間敷く跋扈せる文壇に現はれ、我れこそは汝等の所謂不健全派の詩人なりと名乘り出るの勇ある詩人なきこゝうたてけれ。動もすれば賦詠と人物とを混交し、此奴は厭世家なり、彼奴は失戀者なりなど、許し合へる

短刀直入的の批評家こゝろ、いかはかり詩の發達を害するものにやあらん。これは問題外なれば此には曰はず。英國にては近代の詩人ロセツチの如きは詩卷總て是れ戀愛の歌ならざるはなき程なるが、我が明治の文壇は果して此種の詩人を容れ得るの勇あるや。戀愛の詩は直に胸奥の感情を湛へて詠懷するものなれば、幼稚なる我詩壇にも其人あるべき筈なるに、其詩に就て觀察し來れば、凡て朦朧漠然として、力めて其頭尾を隱くさんとするが如し。さらぬものも直情迸溢するの氣韻頗る乏しきを見る。

○花かけ　（う羅わか草）

とまれ我こま花かけに
わか思ふ人のこゝろすなり
車のうちは見ねども

我名よぶなりひろやかに
くるま先ひけ馬もやれ
我はあのゆまむ花かけを
うれしき君にともなひて
おほろ月夜をたどりつゝ

をとめはつひにさゝやきぬ
家路はとほき夕くれも
君にたよりて行く時に
おほつかなくもなかりけり

花も我世もさかりなる
こよひはかりはせめて君
うれしといはむつひに我
袂はかわきはてずとも

花さくたびに思ふべし
月見るごとに思ふべし
よしや此夜はとくあけて
又見む春はとほくとも

七日の月もかたふきて
もりのあなたになりにけり
我たのしみもつきぬべし
いかにやすべきいかにせん

由來ダンテ、キーツの戀に、深くも同情をよせらるゝ文學界の諸

子は、戀愛の消息に通せらるゝ人々なるべし。近日四季一回の發行として發兌せられたる『う羅わか草』に收められし二篇の新体詩の如きも、二篇共に戀愛に關するものたるは、我輩が詩界の爲に多謝する所なり。唯だ透谷時代の熱情なく、優婉簡約にのみ走せて、其の意味するものをすら捕捉し難きものあるは、あながちに慶すべきにはあらざらん。此に引ける『花かげ』の外、他の『浪の雫』の如きも、詞清ふして調强からざるの憾なきにはあらざるか。

此文。（文庫第六號所載）

しのぶの草の小路さへ、
人目のせきにさへられつ。
みうかに來にしこの文よ、
心づよくはさきたれど、
またなか〳〵によわくして、
綴り見る身ぞあはれなる、
みそかに來にし此ふみよ、
すでにさきたるものなれど、
やかんとすればなか〳〵に、
ためらふ身こそあはれなれ。

これはなか〳〵に露骨に行られたり。かく餘情もなく謠へば、興味索然として一も執るに足るものなかるべけれど、また些少の特色なきにしも非ず。

○妹が家（青年文所載）

日毎にすぐる妹が一家の、

みちべのまませのやゝひくみ、
をり〳〵見ゆる面かげの、
けふもいとすぐるませ垣に、
たゝずむ妹のゆかしさよ。

句簡にして評すべき程のものにあらざれども、前の『此文』と其詩品を同ふするものならん。

所謂專問詩人なるものゝ作に就て、需むるも、滿足なる戀の詩を得るに由なし。我輩が年少無名の作家を煩すも、已むを得ざる也。

以上引用したる詩は果して戀愛の詩と名づくべきものなるか。これも覺束なしと雖も、これをしも戀愛の詩と曰はざる可からざるに至ては、我明治の詩人は、情けなき程に勇氣なきに非ずや。我輩は此般の詩につきては、ふかく文學界の一派に希望を

囑するものなり。彈け、彈け、君等の縱琴の緒の斷へなんまで。

大學派の諸子は別に長所あるべし。

（三）自然の詩　今の詩人の自然思想程不明諒なるものはあらじ。唯だ彼等は意に會し筆に托して、何の理想もなく書き流すものと見ば大誤なからん。田園詩人と稱する湖處子の如きも、自然を如何に解し、いかに同情を托せんとせるや、かゝる問題の湖處子の胸に觸れたるとあるや、疑はしと云ふ可し。其他の自然を歌ふ人々も先づ湖處子と似たもの同士と見るも妨げなかるべし。

『文庫』の『桃花の里』（山百合作）なる一篇は可なりに面白き作なり。湖處子の自然を强ひて感情なき無意識の自然とせば、此は自然に感情を投寓せるものならん乎。

自然の詩は一もとより出でゝ曰ふべき程の價値なきを見れば、

今の詩人程わけのわからぬものは非る可し。生物草木に寄する同情の詩にもあらず、戀愛の詩にもあらず、素より自然の詩にてもなし。

されば雄壯の調に適せるか云ふに、一時時を得貌なりし鐵幹の如きも、甚だ頼もしからず、『肴には、こたびのいくさに斬りたりし、血に染む髑髏五千級』の調にてはいかゞならんか。早稲田の天遊子は韻文の爲には水のみを飲むも敢て辭せずとの熱心ある由、自愛せられよ。青年文、文庫、新文壇などに見ゆる年少作家には、稍注目するに足るものあれど、近時甚だ荒びゆけり。各雜誌とも新體詩欄の寂寥なるは是非もなき氣運なる可し。斯く觀察し來れば、我輩は何人に希望を囑すべきかを知らず。已むなくも新體詩の爲に諸才人に警告するの要を感ず。露伴子が近頃珍しくも新體詩を論じて大に韻文の爲に義を唱ふるの志士を起せよと曰へるが如きは、最も我輩の意に合へるものなり。暫く筆を投じてジニヤスの出現を待たんとす。

◎新體詩人會

未だ會名を聞くに及ばざる故に、敢て新體詩人會と云ふ。此會去る五日上野の三宜亭に開かれし由、近頃よろづ活氣ある新体詩界の一現象とも見るべし。よもや空瓶席に横り、猩々手を扑て舞ひ、それにてお了ひにてはあらざりしならんが、充分の商議を遂げざりしとか聞く。あり勝ちの事なり。

會を起さゞればよき新體詩は出でざるやなど、小理屈は申上ぐ可らず。「虎」の鐵幹、「夕」の信綱、「杜宇」の天來、其他湖處子、子規、羽衣、桂月雨江以下十數名、揃ひも揃ひたりな。げに目覺かりしことゞもなりけりと云ふ。

近頃この會に似たるもの今一つあり。耶佛兩黨の來る廿六日を期して大會を開かんとすることれ。氷炭は相容れず、今の人は能く相容る。鐵幹と羽衣の雜種兒はいかなものならんか。或は言ふやがて墮体するに至らんと。

我は此會起るが爲に、新体詩界の氣運大に勃興すべしとは想はず。此會あるが爲にこれ迄見る能はざりし佳作を與へらるゝことはあらん。奇好の人々の物好きにて、集りたるにはあるまじければ。

諸氏奮發せよ、會は元來永續するものにあらず。諸氏の熱心は會と共に壓死すべからず。會あるも會なきも、諸氏の詩は諸氏の詩なり。駄作を示して專門家ならぬ詩人に笑はれたまうな。

會員としての諸氏の責任は輕からざれば。

我れは今諸氏が僅に第一會を開きたるの時に當り、一二年の向きを見て敢て此言を吐く。（獅子堂）

◎竹の里人

『鹿笛』、『父の墓』を歌ひ、一躍して新體詩人の列に加はりたるものを、竹の里人と爲す。竹の里人とは子規子の變名なりとか、着想殊に凡ならざるを見る。

『日本人』二十六號の『小蟲』四題、何れも簡にして餘韻あり。『蜂』尤も面白く、『虻』これに次ぐ。子が詩の妙は詞藻にあらずしてにらみ樣にあり。『小蟲』四題、事に奇なく珍なし。然かも誦し來て言外の意味を聞く。うの「チヨマものうげに手を擧けて、ちよいと拂へば、飛上り、軒の掛菜をめぐりつつ、何尋ねるか小半日。」の結二句の如き、何の詩趣なきが如くして、實は津々たる詩趣の湧き來るを覺ゆ。『一ひら散れば、三ひら四ひら　皆

さそはれてこぼれけり。赤きが散りぬ。うを見てか　白きも散りぬ。虻は猶……』のうを見てかの如き、僅に五字に過ぎざれども、此五字の中に罌粟の花も塲も景も活きて、目に見るが如き心地す。『蜻群蜻れ飛ぶ其下に晴れて筑波の山低し』の二句に至ては、子が俳句鍛練の餘に出づるものならん。他子の企て及ぶ所にあらず。同誌同號の『戈』『筆』の二題は、子が詩のインスピレシヨンの盡きたる後に書かれたるものなるべく、『小蟲』の四題に比して遜色あるのみならず、辭冗漫にして興味索然殆んど別人の作ならんかと思はる。

花　天　月　地

子此頃俳句の陣より討て出で、大に新体詩の野に戰はんとし、新体詩人會の一員と成る。子は決して鐵幹、羽衣の下に落つるものに非ず。同會若し爲す所あらば、必ずや竹の里人に依て特色を發揮せん。

（古茅庵）

新体詩界

鐵幹の作の多きは水蔭の作の多きが如し、數量は終に本質を增ささるなり。竹の里人等は鐵幹の阿兄のみ、羽衣は依然として進歩の先登に立てり、藤村の作殆んど彼に匹似す。而して羽衣は形に長し、藤村は想に優るとは斯界の公評にして、これを萬葉の歌人に比せんか、彼は赤人の優に美しきに似て其高潔なる處を得ざる者の如く、これは憶良が異方に比すべきも其遒勁の調に乏し、而して赤人の赤人たるは實に其高潔の致に存し、憶良の憶良たるは實に其遒勁の調に在りとすれは、吾人の詩界は未だ二聖が匹儔をも見るに及はざるのみならず、人丸が高古、綺麗、雄大、渾厚、手に從つて生ずるが如きに至つては、杳として影だにもなし。然れども歌聖去つて一千二百歳、天未だ一

人の人丸を下さずとすれば今にして急にこれを求むる寧ろ不倫の極のみ、吾人は唯黄金に似たるアルミに謳歌せん哉。

人は云ふ去年の羽衣は去々年の羽衣に比して寧ろ遜色ありと、これ單に彼が一二の作を取て言を立つる者のみ、今其詞藻の全体に就てこれを云はゝ其流鴨婉麗の調は大に進捗せる者あるを見る、且つや藤村が去年末に於る一大飛躍は何人も否定せざる處なるのみならず、雨江桂月鳥山等の大學派、鐵幹、子規、佐々木信綱氏等が新体詩會を起こしたる「東西南北、」「天地玄黄、」「花紅葉等、」の賣行きよしと稱せらるゝ、新体詩專門の雜誌「やまと琴」の發行せられたる、青年文等の新体詩に稍見るべき者見えたる、さては日本派の俳人が爭ふて新体詩を始めたるなど、皆多少斯道の進運を卜すべき者と云ふべし。

蓋し新体詩集の刊行は斯界の發達に對して尠からざる便利を與ふる者なるべし。うも〳〵文學者は文を賣るを以て目的とすべきに非ずとするも、小說家が小說を作ることを以て衣食の途となすを得るに至つて、小說界の進捗が如何に眼覺しきに至りしかを思はゝ、新体詩家をして其創作に衣食するを得せしむるに至るまでは、到底これに馳騁すべき進歩を見るに至らざるべく、而して書肆と社會とか新体詩家を歡迎するの途は詩集の刊行に初まるを要す。されは吾人は彼の東西南北の如きものさへ板を重ねしと聞きて、斯道の發達期して待つべしと明言するに躊躇せざる也。

韻文

花天月地

終

明治三十二年七月十三日印刷
明治三十二年七月十五日發行

正價金二拾五錢

編輯者　石橋愛太郎
發行者　岩崎鐵次郎　東京神田區豎大工町五番地
印刷者　長谷川辰二郎　東京神田區錦町三丁目一番地
印刷所　同志社印刷所　東京神田區錦町三丁目一番地

版權所有

發兌元　東京神田區豎大工町五番地　大學館

名家文庫
第二編

美文
散文

清風明月

全一冊　七月中旬發兌
正價三拾四錢
郵税四錢
紙數三百頁以上

故勝海舟伯　正岡子規君　鹽井雨江君
德富蘇峯君　柴四郎君　樋口一葉女史
國府犀東君　釋宗演師　高濱虛子君
原抱一庵君　三宅雪嶺君　箕浦勝人君
笹川臨風君　志賀重昂君　渡邊國武子
武島羽衣君　與謝野鐵幹君　中西牛郎君
西村天囚君　白河鯉洋君　依田學海君
田岡嶺雲君　土井晩翠君
中村秋香君　内村鑑三君
鈴木天眼君　大和田建樹君
大町桂月君　中江兆民君
大野洒竹君　森槐南君
陸羯南君　戸川殘花君
幸田露伴君　其他文豪數氏

書を讀み文を弄するもの其行方なるへし、其品性正ならさるへからす、然るに現時此等の輩好んで田夫野人卑猥、蓄行、の風を摸倣するもの何んそ夫れ多きや。猛夏長日四季中の最苦境を脫せんとする是れ人の情也、然れども其方法の年々歳々穢腐し、今や社會の半面は蓄行の暗黑界たり、識者の以て默々に付すべからざるを如何せん

本館此に着眼するあり、當代の君子、文豪が積意の傑作を蒐集し聊か社會風教の上に資せんとし清風明月を編す書中故勝海舟先生の活經世眼と矧川、雪嶺、日南、羯南、蘇峰、露伴、臨風、牛郎等の流暢掬すべき雄文と晩翠、藤村、桂月、雨江、鐵幹等の幽玄高尚なる麗筆と其他文豪の躍如たる健筆とは如何に讀者を利し併せて銷夏の好侶伴として一讀快哉を叫ばしむるか暫く本書の來るを待て月明に風清きの處一書を繙て其眞價を知れ

名家文庫
第一編

美文
散文

白砂青松

正價參拾錢
郵税四錢
郵券代用一割增
紙數三百三十頁

炎威赫々苦熱人を襲ふ宜しく銷夏の策を講すべきのみ。是に白砂青松現はる書中藏る所は現代の文豪が各潛心の筆を馳、駢辭麗句、風雲を鏤め、月露を畫き、一讀人を寒殺す底の妙文を蒐めたるもの、天下好讀の士、一書を繙て淸絕凉絕、坐して白砂青松に遊ぶの快を取り併て文の妙趣を味ひ以て練文の資に供せよ

掲載目次

◎十年前の夏……正岡子規　◎風流妄語……尾崎紅葉　◎夜半……大和田建樹
◎富士行者……久保青琴　◎學海漫筆……依田學海　◎靜御前……戸川殘花
◎雲のいろ〳〵……幸田露伴　◎孔子と馬琴……大町桂月　◎うつし世……武島羽衣
◎豆相遊記……東海散士　◎夕の里……土井晩翠　◎斷片十種……江見水蔭
◎村居漫筆……島崎藤村　◎曼珠砂華……高濱虛子　◎客作雜興……田岡嶺雲
◎旅のつゞれ……破連　◎片影錄……春雨庵　◎哀歌……海棠　◎土井晩翠
◎湖心亭の記……大野洒竹　◎奇童子……遲塚麗水　◎利根の夜船……赤松國祐
◎磯うつ涙……佐々木信綱　◎賢博札記……森槐南　◎妙義山の月……三日坊
◎讀書漫言……茫々生　◎金剛杵……齋藤綠雨　◎鏡影……與謝野鐵幹
◎七部集……高濱虛子　◎夏期の追懷……末松謙澄　◎湘南雜興……笹川臨風
◎玄武朱雀……泉鏡老　◎菊女想夫の文……古文　◎松島遊記……久保青琴
◎試驗……瓜抱　◎詩歌に於ける音意の諧調……武島羽衣
◎歌反古……島崎藤村　◎あはれ〳〵此月……中村秋香

發兌　東京市神田竪大工町五番地　大學館
賣捌　全國書店　雜誌　肆

文學七〇高等師範學校講師宮本正貫君序　岩崎戯次郎編纂

作文必携　助字用法詳解

全一冊　正價金十五錢　郵稅金四錢

本書ハ●也、矣、焉●乎、哉、耶●耳、爾、已●殆、幾●蓋、夫、抑●則、乃、即、輒、便●猶、尚、仍、等●助字數百ヲ集メ之ヲ決定辭(也矣ノ類)、怪疑辭(平哉ノ類、發問辭(誰孰ノ類)、願望辭、禁止辭、命令辭、被命辭、分別辭、形狀辭、想像辭、發端辭、歎息辭、指示辭、接續辭、推致辭、關係辭、反動辭、假設辭、動作辭、時刻辭、併列辭、分量辭、比較辭、反對辭、發着辭ノ二十五章ニ類別シ以ナ各字ノ意義、用法、區別、實例等ヲ詳說セリ

文學士高等師範學校講師　宮本正貫君序　岩崎戯次郎編纂

漢文速成　和文漢譯秘訣

全一冊　正價金十五錢　郵稅金四錢

和語ヲ漢語ノ語勢ニ變更スル練習法ヨリ復文十數例ヲ擧ケ實字虛字助字ノ用法及語句ノ轉倒配置ヲ一字一字詳說シ又譯文ノ異同ヲ識別シ譯文ノ運用變化ヲ會得セシムル爲メ同一文ヲ數種ニ漢譯シタル名家ノ和文漢譯例ヲ示ス又譯文論評編ニハ譯文ノ方法秘訣ヲ詳說セリ

法學士　加藤正雄君序

書法秘訣　習字速成圖解

全一冊　正價金十五錢　郵稅金二錢　插圖三十二個

本書ハ永字八法●草字筆法●一文字五形修練術●忍返シ筆法●執筆法等ヲ總テ圖ヲ以テ詳說シ其他●執筆、運筆、姿勢、習識、四修、習情、文字之懷、筆勢、筆拍子、去頑、黑色、生字死字病字等ノ秘訣●魏太祖、王羲之、晉成帝、柳公權、東坡等ノ書法極意ヨリ●書體ノ種類筆道用具ニ至ル迄詳ニ說明シタレバ如何ナル惡筆モ本書ニ因テ練習スレバ期月ノ間ニ妙筆人ヲ驚スニ至ラン

發行所　東京神田區竪大工町五番地　大學館

物理學試驗問題答案集

全一冊　正價金十五錢　郵稅金二錢

代數學試驗問題答案集

全一冊　正價金十五錢　郵稅金二錢

一讀奮起　和漢洋金言集　附錄　奈破崙行錄

全一冊　正價金十五錢　郵稅金二錢

東京城北中學校々長　今泉定介君序文　工學士　藤農之君序文

- ●日本歷史　新大學館撰　問答
- ●支那歷史　新大學館撰　問答
- ●萬國地理　新大學館撰　問答
- ●物理學　新大學館撰　問答
- ●博物學　新大學館撰　問答
- ●算術理論　新大學館撰　問答
- ●萬國歷史　新大學館撰　問答
- ●日本地理　新大學館撰　問答
- ●地文學　新大學館撰　問答
- ●化學　新大學館撰　問答
- ●生理學　新大學館撰　問答
- ●教育學　新大學館撰　問答

(正價　郵稅)　一冊　一冊　金二錢　金七錢

●右問答書類ハ諸學校ノ教科書中ヨリ各科必要ノ問題數百ヲ精撰シテ簡明ノ答案ヲ附シ尤モ記臆上ノ便ヲ謀リタレバ教師ノ參考用學生ノ受驗用獨習用トシテ無比ノ良書也●紙數百三十頁●爲替振込ハ神田今川橋局郵券代用一割增

發兌所　東京神田區竪大工町五番地　大學館

實用英語

第拾壹號七月一日發行〔毎月二回、一日、十五日、發行〕
〔毎號紙數菊版形八十頁〕

英作文添削 博言博士 イーストレーキ

活用自在 實用會話 フランクリン
自叙傳詳解
●ロングマン第四讀本註釋 ●ナショクル第四讀本註釋 ●ユニオン第四讀本註釋

豪傑逸事 和文英譯 毎號擔當
●頓語異同辨●書簡文練習●慣用語句集●同語異品詞●時と助動詞●應用英文典●英字新聞研究●同音異字
（九號ヨリ左ノ註釋ヲ載ス）
プッシング ツー、ゼ、フロント
一冊八錢●六冊四拾五錢●十二冊八十四錢●廿四冊一圓五拾六錢●郵税冊一錢

英語試驗問題 答案

英語難問 質疑應答 高橋五郎擔當 英學大家

英文法講義 法學士愛堂生

英文 和譯指南 カリエント主筆 杉村廣太郎擔當

和文 英譯指南 ジヤパンタイムス 勝俣銓吉郎擔當

●壹ヶ年完成●正則假名付●

英語自宅獨習 初學 ●ナショナル第一讀本〔讀方及新式譯解 ●ロングマン第一讀本〔讀方及新式譯解 ●詳解●發音詳解各種の單語●日用單語（イーストレーイキ）●英習字圖解

第壹號ヨリ毎號取揃御注文ニ應ズ

第十二號ヨリ農學士佐久間信恭氏ノ「スイントン英文學註釋」ヲ載ス

發行所 東京市神田區竪大工町五番地 大學館

6923